捜索烏(ソウサクカラス)

境 鏡介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
捜索烏（ソウサクカラス）

【Ｎコード】
Ｎ２８３９Ｆ

【作者名】
境　鏡介

【あらすじ】
探偵業を営む烏山寂（カラスヤマジャク）の元に、ある女性が依頼にやってきた。女性は行方が分からなくなった恋人を探して欲しいという。依頼を受けた烏山は、自分の姪でもある助手の姫路泪（ヒメジルイコ）子と共に捜査に乗り出すが…。烏シリーズ第２弾。

第1章：暇

「暇だぁ」
と、姫路泪子（ヒメジ ルイコ）は欠伸混じりに言った。
小さいビルの2階にある、烏山探偵事務所には依頼人はいなかった。
泪子は、通りに面した窓を背にしている所長の椅子に馬乗りになって、外の風景をぼんやりとした様子で眺めていた。
泪子の顔に、排気ガスを伴った冬の冷たい風が吹き付けた。
泪子は大きなくしゃみをすると、鼻をこすった。
「…暇だぁ」
と、泪子は再び言った。
事務所のドアが開いた。
泪子は、背もたれに顎を乗せたまま、椅子を回転させた。
ドアの所に、長身の男が立っていた。
烏山探偵事務所所長、烏山寂（カラスヤマ ジャク）。
今は、『Ｉｐａｎｅｍａ』（イパネマ）とロゴが入ったエプロンをしている。
「暇か？」
烏山はデスクに近づきながら、泪子に訊いた。
泪子は椅子をグルグルと回しながら、
「ひ～ま～！」
と、大声で言った。
回転の遠心力で、泪子の栗色に染めたセミロングの髪が持ち上がった。
烏山は事務所の中を見回した。
ソファ、テレビなどの応接セット。
デスクの真向かいにある流し台や、コンロ、冷蔵庫。
デスクの横の書類棚。

入り口の向かい側の壁に貼られている、マリリン・モンローのポスター。
あまり飾り気の無い部屋は、寒々しく見えた。
泪子は椅子で回転するのを止めると、下を向いて低く唸った。
「…気持ち悪いぃ」
と、泪子は頭を揺らして言った。
烏山はため息をついて、泪子の背中をさすった。
長袖のTシャツを着ている泪子は、
「…叔父さん、下着に気をつけてね」
と、言った。
烏山は苦笑いをして、背中をさする手を止めた。
「窓、閉めるぞ」
烏山はそう言って、開きっぱなしだった窓を閉めた。
泪子は顔を烏山に向けると、猫の様に大きな瞳を恨めしそうに細めた。
「…叔父さん。探偵やってる時間より、お花屋さんやってる時間のほうが長いんじゃない？」
烏山は自分のエプロンをチラリと見た。
「そうかもな」
「つまり、私も探偵の助手をやってる時間より、お花屋さんの手伝いをやってる時間のほうが長いわけだ」
「そうかもな」
「叔父さん。お花屋さんになれば？」
「そうきたか」
烏山はデスクに座って、言った。
泪子は烏山のエプロンを引っ張りながら、
「…あんまり、コレは似合わないけどさ」
と、言った。
「まぁ、暇なら暇でいいだろう。暇なら暇なりに仕事がある」
と言って、烏山はデスクの上に置いてある小箱を開けた。

箱の中には、棒つきのキャンディが入っていた。
「例えば？」
泪子は、キャンディをつまみ上げた烏山に訊いた。
烏山は考え込む様子で、キャンディの包みを剥がした。
「…花屋」
烏山の答えに、泪子はため息をついた。
「叔父さん」
泪子は、真剣な顔つきで烏山を見つめた。
烏山は、キャンディを口に入れようとしていた手を止めた。
「青巻紙・赤巻紙・黄巻紙！」
と、泪子は早口で言った。
「あまりっ…」
烏山は舌が回らなかった。
「叔父さん、暇なときには早口言葉の練習したほうがいいよ」
と、泪子は言った。
烏山はキャンディを口に含んだ。
ドアをノックする音が聞こえた。
ドアがゆっくりと、控えめに開けられた。
スーツ姿の女性が、顔を覗かせた。
「あの、探偵事務所ってここですか？」
泪子は、椅子から元気よく立ち上がり、
「依頼ですかっ？！」
と訊いた。
「あ、はい」
と、女性は答えた。
「どうぞ、お入りください。…叔父さん、エプロン外して」
烏山は部屋の片隅にいき、依頼人から見えないようにエプロンを外した。

第2章：頼

烏山探偵事務所を訪れた女性は、泪子に促されるまま、ソファに腰を下ろした。
女性は、グレーのスカートタイプのスーツを着、黒い髪を頭の後ろでまとめていた。
唇が少し厚い。
烏山はキャンディを紙で包むと、デスクの横のゴミ箱に捨て、エプロンをデスクの椅子の上に置いた。
「姫路君。紅茶を」
泪子は頷くと、キッチンスペースに向かった。
女性の向かい合わせの席に、烏山は座った。
「所長の烏山です」
そう言って、烏山はシャツの胸ポケットから名刺を取り出し、女性に手渡した。
女性は名刺を受け取ると、紙面を流し見た。
「お名前を伺ってもよろしいですか？」
女性は名刺から顔を上げた。
「あ、太田真紀子（オオタ マキコ）です」
「それでは、太田さん。依頼についてお伺いしたいのですが…」
「…はい。人を探して欲しいんです」
「人を？」
「はい」
「単なる人探しでしょうか、それとも『いなくなった』方の行方を調べれば良いのでしょうか？」
女性は顔を伏せて、落ち着かない様子で名刺をもてあそんだ。
泪子は紅茶の用意をする合間に、烏山達の様子を窺っている。
「…連絡がつかなくなったんです。2週間程、前から」
沈黙の後、女性は答えた。

「それまでは、連絡は取れていた？」
「はい」
「今では全く取れないと？」
「はい…」
「最後に会ったのはいつ頃ですか？」
「そうですね…。それも2週間くらい前ですね」
「なるほど」
烏山はチラッと、泪子の方を見やった。
泪子は慌てた様子でカップの用意を再開した。
「…分かりました。お引き受けします。その方を探す手がかりになりそうな物、何かお持ちですか？」
「あ、はい」
真紀子は横に置いていたバッグから手帳を取り出すと、中から写真を1枚取り出して烏山に渡した。
烏山は写真を見た。
線の細い、痩せた男が写っていた。
少し垂れた目をした男は、白い歯を烏山に見せていた。
写真は、半分に切り取られていた。
「この方を探せばいいのですか？」
「はい。坂上冬彦（サカガミ フユヒコ）といいます。不動産関係の会社に勤めています」
「失礼ですが、この方とのご関係は？」
真紀子は照れくさそうにして、
「…お付き合いをさせてもらってます。ひと月くらい前から」
と、言った。
泪子は、烏山達に背中を向けて、口笛を吹く真似をした。
烏山は、写真の切断面を指先で撫でながら、
「この写真の、右側はどうされたんですか？刃物で切り取ったようですが…」
と、訊いた。
「その写真は私も写っていたんです。でも、私、他人に写真を見

られるのが嫌いで…。それで、切ってきちゃったんです。…いけなかったですか？」
真紀子は不安げに訊いた。
写真の坂上冬彦は、誰かの肩に手をまわしている様子だった。
華奢な肩が切断面すれすれに見受けられた。
「いえ、問題ないですよ。他には何かありますか？この方の住所や電話番号等は？」
「携帯電話の番号と会社の住所でしたら」
「結構です。それでは、調査の方法等について説明させて頂きますので、少々お待ち下さい」
そう言うと、烏山は立ち上がって、デスクに向かった。
烏山はデスクの引き出しに手をかけると、泪子の背中に向かって声をかけた。
「…姫路君。やかんのお湯、もう沸いてるんじゃないかな？」

「綺麗な人だったね。さっきの女（ヒト）」
カップを片付けながら泪子は言った。
烏山はデスクの椅子に座り、両目を閉じて目頭を揉んでいる。
「…そうだな」
「恋人を探してほしいなんて、なかなかロマンティックよね」
「そうだな」
「反応が悪い！」
泪子はカップを片手に、烏山を指差して言った。
烏山は泪子を見た。
「そうかな？」
「そうだよ」
「じゃあ、気をつけよう」
「なら、よし」
泪子はカップを流し台に置くと、ソファに寝ころんだ。

烏山は何事か考え込んでいる様子で、目頭をもんでいる。
泪子は、両肘をソファにつけると、両の掌で顎を支えた。
「叔父さん？」
「泪子、今何時だ？」
「自分で見なさい」
「はい」
烏山は目を開けて、自分の腕時計を見やった。
午後３時１７分。
「…よし。泪子、一旦家に帰れ。５時くらいに迎えに行く」
「何で？」
と、泪子は目をパチクリとさせて訊いた。
「泪子に用意してもらいたいことがある。泪子にしか出来ない」
泪子はふぅんと言って、ニヤリと笑った。
「…了解。それで、何を用意すればいいの？所長ドノ？」

第3章：演（前書き）

期間が開いてしまい、申し訳ありません。

第3章：演

１２月の午後６時に近い街には、夕焼けの色は無かった。
店名を掲げた、色とりどりの光。
道を流れるヘッドライト、テールライト。
歩道の上で人工の光を放つ街灯。
烏山は、運転していた青いミニクーパーを路肩に停めた。
烏山はルームミラーに視線をやった。
後部座席では、泪子がふくれっ面で座っている。
泪子は旅行に行くような、大きな荷物を座席の横に置いていた。
烏山は、ルームミラーの中の泪子に話し掛けた。
「…ここから5分程行ったところに、捜索対象の会社がある。８階建てのビルの、３階と４階に入っている。受付は３階だ。道順は、さっき渡した紙に書いてある」
泪子は、ルームミラーに映った烏山を睨みつけた。
「面倒くさいこと、押し付けて！」
烏山は曖昧に微笑んで、泪子の言葉に答えた。
「そう言うな。泪子にしか出来ない」
「そりゃ、そうだろうさ」
「出来ないか？」
「臨時報酬を希望する」
そう言うと、泪子は掌を上に向けて、右手を差し出した。
「上手くいったらな」
「上手くいくってば」
「考えておく」
「考えるだけ？」
「今のところはな」
泪子は歩道に面した側のドアを開けた。
泪子は車の外に立つと、赤いリュックを背負い、赤いキャリーケ

ースを手に取った。
泪子は車のドアを勢いよく閉めた。
「泪子」
烏山は運転席の窓を開けて、泪子に呼び掛けた。
烏山は助手席に置いていた白い紙袋を手に取って、泪子に手渡した。
泪子は中を覗き込んだ。
中身は、ラッピングされた菓子の箱だった。
「手土産だ」
と、烏山は言った。
泪子は紙袋を持った手を腰に当てて、
「覚悟しとけよ。絶対、上手くやってみせるから！」
と啖呵をきり、歩道を歩いて行った。
キャリーケースを乱暴に引く音が、車から離れていった。
烏山は泪子の背中を見送ると、ドアポケットからキャンディを1つつまみ出した。
烏山は、包み紙も棒も入っていない、車の灰皿を引き出した。
キャンディの包み紙を灰皿に押し込み、烏山は車のリクライニングを倒した。

ビルに入り、エレベーターに乗ると、泪子は3階で降りた。
真正面に、ドアが開け放してある部屋があった。
泪子はドアの左側の壁に掲げられている社名と、手に持った小さな紙切れに書かれている社名を見比べた。
「藤巻(フジマキ)不動産…。ここか」
そう呟くと、泪子はガラガラと音をたてて室内に入った。
受付のカウンターには誰もいなかった。

カウンターの後ろには衝立があり、その向こうからは物音と話し声が聞こえた。
「あの、すいませ～ん」
泪子は呼び掛けた。
ガタガタと音がすると、衝立の後ろからスーツ姿の女性が姿を現した。
口元に皺が浮かんだ、４０代半ばくらいの女性は、不信そうに泪子を見た。
「なにかご用ですか？」
ガラガラ声の女性は泪子に訊いた。
泪子はリュックを背負い直し、
「あの、坂上冬彦さん、いますか？」
と、小さな声で訊いた。
「坂上君？」
「はい」
「あなた、彼とどういう関係？」
「いとこです。どうしても連絡がつかなくて…」
女性は泪子の顔、リュック、キャリーケース、手に持った光沢のある白い紙袋へと視線を移した。
「約束してたの？」
幾分か和らいだ様子で、女性が訊いた。
「はい。迎えに来てくれるって、言ってたんですけど…」
泪子は眉を寄せ、不安げな表情で女性を見た。
「そうだったの」
女性は困ったような表情をして、
「でもね、坂上君、会社に来てないのよ。電話もつながらないし」
と、言った。
泪子は驚いた顔で、
「本当ですか？」
と、聞き返した。

「そうなのよ。もう1週間以上ね。それに、家にも帰ってないみたいなのよ。もう困っちゃって」
「そんな…。どうしよう」
泪子は泣きそうな声で言った。
女性は慰めるように、
「…他に、東京に知り合いはいないの？」
と、泪子に訊いた。
「…いないです」
「そうなの…」
そう言って、女性は考え込む様に腕組みをした。
「あなた、坂上君の家の場所は知ってる？」
「知りません」
「ここの場所は、教えてもらってたの？」
と、女性は不思議そうに訊いた。
「前に、名刺をもらって」
女性は納得したように頷き、
「そうなの」
と、言った。
「…どうしよう」
泪子は震える声で、もう一度言った。
女性は泪子の様子を見て、
「ちょっと待っててね」
と言って、衝立の後ろに消えた。
1分もたたずに女性は戻ってきた。
手に小さなメモ用紙を持っている。
「はい。これ、坂上君の家の住所。最寄り駅も書いてあるから」
と言って、女性はメモを泪子に差し出した。
泪子はメモを受け取った。
「汚い字でしょ？でもね、この間もそれ見ながらで、きちんと着いたから。大丈夫よ」

と、女性は笑って言った。
「いいんですか？」
「いいわよ。坂上君がいれば、それでいいし。いなかったら、管理人さんに事情を話せば入れてくれるわよ」
泪子はホッとした顔をして、
「ありがとうございます！」
と言って、頭を下げた。
「いいわよ。…大学受験？」
と、女性は話題を変えて訊いた。
「はい。今年こそ受からないと」
「頑張ってね」
「はい。ありがとうございます」
泪子はメモをチラリと見て、
「じゃあ、行ってみます」
と、言った。
「そう。坂上君にあったら、会社に連絡するように言ってね」
「はい。必ず伝えます。お邪魔しました」
泪子は再び頭を下げると、キャリーケースを引きずってエレベーターの所に行った。
泪子が階下へと向かうボタンを押すと、扉がするすると開いた。
エレベーターに乗る前に、泪子は振り返った。
受付カウンターには先ほどの女性が、まだ立っていた。
泪子は軽く頭を下げてからエレベーターに乗った。
扉が閉まり、エレベーターが下へと動き出すと、泪子はため息をついた。
「…いい人でよかった」
泪子は安堵したように呟いた。

泪子が烏山の車の中を覗むと、烏山は座席のリクライニングを起こした。
烏山は窓を開けた。
「…どうだった？」
泪子はメモの端をつまんで、烏山の目の前でヒラヒラと動かした。
「作戦成功！」
得意気に泪子は言った。
「そうか」
「それだけ？」
「よくやったな」
「それだけ？」
「…分かった。給料のことは安心しろ」
「それでよし」
泪子はメモを烏山に渡した。
烏山はルームライトをつけて、メモに目を通した。
泪子は車内に視線を移した。
助手席には、コンビニエンス・ストアの小さなビニール袋が置かれていた。
泪子は車の灰皿を見て、目を丸くした。
灰皿からキャンディの包み紙と、白い棒が溢れんばかりに押し込まれていた。
泪子は腕時計を見た。
午後６時２６分。
「何本食べたのよ…」
と、泪子は呟いた。
「何か言ったか？」
烏山はメモから目を上げずに訊いた。
「別に」
「そうか。よし、大体の場所は分かった。行ってみよう」

「了解」
泪子は後部座席のドアを開け、荷物を放り込んだ。
車に乗り込みドアを閉めると、
「叔父さん。心配した？」
と、訊いた。
「いや。上手くやると思ってたからな」
と、烏山は答えた。
「そういうことにしておくか」
「出すぞ」
烏山はハンドルを握り、車の流れに入っていった。

第４章：嘘

藤巻不動産の入っているビルから、車で２０分程の所に、坂上冬彦の住んでいるアパートがあった。
住宅街の一画にある３階建て、鉄筋コンクリート製のアパート。
太陽はすっかり落ち、空は黒くなっていたが、辺りは家々の窓から漏れる光や街灯の影響で、暗くはなかった。
烏山はアパートの前で泪子を降ろし、アパートのすぐ近くのコインパーキングに車を止めに行った。
泪子は白いダウンジャケットに袖を通しながら、アパートを見上げた。
横に長い造りで、白い壁、緑色の屋根や階段の手すりが特徴的だった。
泪子は手を後ろに組んで、アパートの１階に並んでいる郵便受けに近付いた。
郵便受けは１列４個で、３列並んでいた。
「坂上〜。坂上〜」
と、呪文を唱えるように言って、泪子は右手を郵便受けの表面に滑らせた。
泪子は指を３０４号室で止めた。
「３０４号室。坂上」
泪子は郵便受けに書かれている名前を読んだ。
烏山は車を止め終わると、アパートの前に立った。
黒いスーツの内ポケットから革の小物入れを取り出し、烏山は中からキャンディを取り出した。
烏山は小物入れをポケットに戻しながら、泪子に近付いた。
泪子は烏山の足音に気付いたように、郵便受けから烏山に視線を移した。
「叔父さん。３０４号室だって」

「上か」
烏山はキャンディの包み紙を剥がしながら言った。
泪子は烏山の手からキャンディを取り上げた。
泪子は、少し驚いたような顔をしている烏山に向かって、
「食べ過ぎ。糖尿病になるよ」
と、咎めるような口調で言った。
烏山は、手持ち無沙汰になった両手をズボンのポケットに突っ込むと、アパートの階段に向かった。
泪子はキャンディの包み紙をジーンズのポケットに押し込んで、烏山についていった。
階段は泪子達から見て、アパートの右端にあった。
烏山達は、コンクリートの階段を3階まで上がった。
狭い通路を進み、突き当たりの所にあるドアの前で、烏山は立ち止まった。
烏山は目の前にある３０４号室のドアをノックした。
「坂上さん。お届け物です」
「嘘つき」
と、泪子は小さな声で言った。
「嘘も使いようだ」
「そうだね」
「いないみたいだな」
今度は泪子がドアをノックした。
「坂上さ～ん。ガスの点検に参りました～」
「泪子。『お届け物』で統一しらやか？」
泪子はキャンディを口に入れて、烏山を見やった。
「『お届け物』で統一しないか？」
と言った泪子の声は、キャンディを口に入れているせいで、こもっていた。
「そうだ」
「嘘には変わりないでしょ？」

「…嘘でも流れは大事だぞ」
「でも、言っちゃった」
「仕方ないな」
「返事無いね」
と言って、泪子はドアノブに手をかけた。
泪子がノブを捻り、手前に引くと、ドアが開いた。
泪子は慌てたようにドアを閉めた。
泪子はドアノブを握り締めたまま、烏山を見上げた。
「…開いたよね？」
泪子は、確認するように烏山に訊いた。
烏山は目を細めた。
「…開いたな」
烏山は声を低くして答えた。
「テレビドラマとかだとさ。こういう場合には、中に死体があるってパターンが多いよね」
「コンビニにでも行ってるのかもしれない」
「入る？」
「入る」
「もし、死体があったら？」
「悲鳴をあげろ」
「叔父さんは？」
「電話をかける」
「もし、私が気絶したら救急車も呼んでね」
そう言うと、泪子は深呼吸をして、ドアノブをゆっくりと引いた。
ギギッと音をたてて、ドアが手前に向かって開いた。
「…お邪魔しま～す」
泪子は、小さな声でおずおずと言った。
ドアの先はフローリングの短い廊下だった。
狭い玄関口で靴を脱ぎ、泪子達はフローリングの上にあがった。
廊下の右側にはドアが２つあり、玄関に近い方が曇りガラスのド

ア、奥の方が白い木製のドアだった。
左側の玄関に近い方には洗濯機があり、奥に向かって、流し台や冷蔵庫等が置かれている、キッチンのようなスペースがあった。
この数mの廊下の先に、半開きのドアが薄暗い中にぼんやりと見えた。
泪子は壁に寄って、烏山に道を譲った。
泪子は烏山を見上げ、急かすようにドアを指差している。
烏山は体を斜めにして、泪子の横を通り過ぎると、奥のドアを押した。
ドアは音も無く開いた。
烏山は中に入って、部屋を眺めた。
ドアのすぐ左に照明のスイッチがあり、烏山はスイッチを押した。
明かりがついた。
部屋の中は8畳ほどの広さがあった。
廊下側から見て、烏山が開けたドアは部屋の左側の壁に近い所にあった。
正面の壁にはベランダへと続くガラス戸があった。
ガラス戸にはカーテンが半分、かかっている。
ガラス戸の前には、黒いデスクが右側の壁を向くようにして置かれていた。
左側の手前はベッド、奥にはテレビやコンポ等が置かれていた。
ドアがある壁には、クローゼットの扉があった。
泪子はキャンディを持って、部屋に入ってきた。
「…死体は？」
と、泪子は訊いた。
烏山はズボンからハンカチを取り出した。
ハンカチでクローゼットの取っ手を包み、烏山はクローゼットを開けた。
中にはスーツやコート等がぶら下がっており、下には半透明のケースが3つあった。

ケースの中から、Tシャツや下着が透けて見える。
烏山は泪子を見た。
「…見ての通りだ」
泪子はキャンディを口に入れると、はいているジーンズからハンカチを取り出して、廊下に戻った。
ドアを開ける音と、閉める音が2回づつ、聞こえた。
烏山はデスクの上を眺めた。
ノートパソコン、卓上ライト、写真立て、重なった書類や雑誌。
烏山は写真立てに視線を止めた。
泪子が部屋に戻ってきた。
「空っぽだよ」
泪子が喋る度に、口から出ている棒が動いた。
烏山はハンカチで覆った手で、埃がうっすらと積もった写真立てを持ち上げた。
泪子は烏山の近くに寄った。
「どうしたの？」
烏山は泪子に答えずに、上着の内に手を入れて、坂上冬彦の写真を取り出した。
烏山は写真立てと半分に切られた写真を縦に並べた。
烏山は眉をひそめた。
「どうしたの？」
泪子はもう一度訊いた。
「見ろ」
そう言って、烏山は泪子に見えるように写真を傾けた。
縦に並んだ2枚の写真を見比べ、
「あれぇ？」
と、泪子は素っ頓狂な声を出した。
どちらの写真でも、坂上は左側に写っていた。
どちらも同じ色、形状の服を着ており、どちらも白い歯を烏山達に見せていた。

「…同じ写真？」
「そのようだ。この写真は屋外で撮ったものだ。太陽の光の当たる角度も同じだ」
そう言って、烏山は2枚の写真を重ねた。
上には半分の写真、下には写真立て。
半分で途切れた坂上の腕が、写真立ての坂上の腕に繋がった。
坂上は、女性の肩に腕を回していた。
「この女（ヒト）…」
泪子は言葉を途切らせた。
坂上と一緒に写っている女性。
黒髪のショートカットで、頭を少し傾げた女性。
烏山達に微笑みを向けたその女性は、烏山達の依頼人、太田真紀子ではなかった。
「1つだけ言えることは…」
泪子は、言葉を途切らせた烏山を見上げた。
烏山は言葉を続けた。
「…彼女は俺達に嘘をついていた、ってことだな」

第5章：探

「…駄目。太田さん、出ないよ」
携帯電話を切った泪子は、烏山に向かって言った。
烏山は、坂上冬彦の部屋のガラス戸の前に立っている。
烏山はカーテンをめくった。
泪子はキャンディの棒を口から出して、眺めた。
飴はほとんど無くなっている。
「…本当に、太田さんって坂上さんの彼女じゃないのかなぁ」
と、泪子はぼんやりとした様子で言った。
泪子は棒で、元の位置に戻された写真立てを指した。
「この女は、昔の彼女かもしれないでしょ？」
「…昔の恋人の写真を飾っておくのか？違う人と付き合っているのに？」
と、烏山は泪子を振り返らないで言った。
「そういう人もいるでしょ？」
「そういうものか？」
「そういう人もいるよ」
「そうかもな」
「叔父さんは、昔の彼女から貰った物とか残しておくタイプ？」
烏山は動きを止め、身を固くした。
「どうなの？」
「…話がそれたな。何にせよ、彼女は言っていた。写真には自分も写っていた、と。しかし、その写真に彼女は写っていない」
「そりゃそうだけど…」
「知る必要の無いことかもしれないが、な」
そう言って、烏山はカーテンを開けた。
小さなベランダがあり、上の方には物干し竿があった。
部屋の明かりを受けて、白いシャツや靴下が闇にぼんやりと浮か

び上がった。
カーテンが覆っていた方に、洗濯物が風で端に押されたようにして、かたまっている。
「…見たところ、とっくに乾いているようだ。少なくとも、今日干したものではないな」
烏山はカーテンを閉めると、泪子を横切り、扉が開いたままのクローゼットの所に戻った。
泪子は、スーツのポケットの中を探りだした烏山を見て、思いついたようにして廊下に戻った。
開いたドアから、泪子の声が部屋に届いた。
「叔父さん。全然、生ゴミのにおいはしないよ。流し台に、洗ってないグラスも無いし」
「料理はしないのかもしれないな」
烏山は、3着かけてあるスーツの、最も左にある物を探りながら言った。
冷蔵庫を開ける音がして、オレンジ色の光が廊下に広がるのが、ドアの隙間から見えた。
「そうかもね。肉も野菜もないよ。お酒、ジュース、調味料。あとは、賞味期限切れの卵が4つ」
「賞味期限はいつまでだ？」
「えっと、12月2日」
「5日前か」
「うん」
「よし。次はトイレと風呂を頼む」
「了解」
泪子は冷蔵庫のドアを閉め、トイレの方に移動した。　烏山は泪子がトイレと風呂を調べている間に、スーツのポケットを調べ終わった。
メモ1つ見つからなかった。
烏山はクローゼットのドアを閉めた。

泪子が棒をくわえたまま、部屋に戻ってきた。
「おかしいところは無いよ。きれい好きみたいだね」
「そうか」
烏山はそう答えて、デスクの椅子の上に置かれているビジネスバッグに目を止めた。
泪子はジャケットのポケットに両手を突っ込むと、不思議そうに、
「叔父さん、寒くないの？」
と、デスクに移動した烏山に向かって言った。
「別に。気にはならないな」
烏山はサラッと答えて、バッグを開けた。
烏山はバッグの中を調べながら、
「泪子、写真立てに写っている女性を撮ってくれ」　と、泪子に言った。
「ケータイのカメラでもいい？」
「仕方ないな。次からはデジカメを持っていてくれ」
「了解」
泪子は携帯電話を取り出し、写真立てに近づいたり離れたりした。
携帯電話をいじり、画像を調節してから泪子は写真を撮った。
烏山は、バッグから掌サイズのカード入れを取り出した。
「何それ？」
泪子が覗き込んだ。
烏山は本状のカード入れを開き、パラパラとめくった。
透明なビニールの中に、様々なカードが収まっている。
「…免許証や会員証が入っているな。坂上は財布にはカードを入れてなかったらしい」
「財布はあったの？」
「いまのところ見当たらない。ケータイと鍵もな」
泪子は猫のように大きな目を丸くした。
「その３つは使用頻度が高く、大切なものだ。だから身につけているし、部屋に帰れば分かりやすい所に置く」

「空き巣が持っていったのかもしれないよ」
「その可能性はある。しかし、もしも俺が空き巣なら、電化製品も盗っていくだろうな」
烏山はカード入れをバッグに戻した。
「泪子。パソコンのメールを見てくれないか」
「了解。でも、ロックされてたら？」
「あきらめる」
烏山はそう言って、バッグからシステム手帳を取り出した。
泪子はパソコンを開き、起動させた。
パソコンが立ち上がるまでの間、泪子はデスクの引き出しを開けたり、テレビやコンポが置かれている棚を調べたりしていた。
烏山はデスクから離れ、ベッドに腰掛けて、手帳をめくっていた。
パソコンが立ち上がると、泪子はハンカチを人差し指に巻きつけて、メールのチェックをした。
仕事関係のメールしか見つからなかった。
「…そりゃそうだよね。ケータイがあるんだもん」
と、泪子は呟いた。
烏山は泪子の背中に向かって、
「どうだ？」
と、訊いた。
泪子は大げさに肩をすくめた。
「仕事のメールばっかり。そっちは？」
「…こちらも仕事の書き込みが多いが、引っかかるものがいくつかある」
「どれ？」
泪子はそう言って、烏山の横に腰掛けた。
「見ろ。スケジュールの１１月。毎週土曜日に丸がついている。内容は同じだ。２０時。『ラウンジ・ミッドナイト』。待ち合わせだな」
「１１月より前は？」

「バラバラだが、土曜日に丸がついている頻度は高かった。次に、メモのページだが…」
ハンカチで覆った手で烏山は素早くページをめくった。
「…ここだ。この走り書き。ペンで丸く囲まれている」
泪子は、烏山が指差している、走り書きを読んだ。
「字、下手だなぁ。えっと…、「夕子、9時、ラウン」？」
「おそらく、夕子（ユウコ）という名前の女性と、午後9時に、『ラウンジ・ミッドナイト』という場所で待ち合わせの約束をしたのだろう。急な変更だったらしいな」
「『ラウンジ・ミッドナイト』って？」
「さぁな。レストランかバーか…。スーパーの名前かもしれない」
「スーパーじゃないでしょ」
「可能性の話だ」
「まぁいいけどさ」
と、泪子は棒を上下に動かして言った。
烏山はページをめくり、
「…残念だが、これ以上の情報は無いな」
そう言って、手帳を閉じた。
「どうするの？」
烏山は手帳をハンカチで拭きながら、
「引き上げる。何にせよ、今日のことは太田さんに報告しなくてはな。第一、今は坂上が鍵をかけずに出かけたから、開いていただけかもしれない」
と、言った。
「鍵を持って？」
「鍵をかけるのを、忘れたのかもしれない」
「暖房がついていた様子も無いのに？」
と、泪子はポケットに手を入れたまま言った。
「つけなかったのかもしれない」
「…ふぅん」

不満そうに言うと、泪子は立ち上がり、パソコンをシャットダウンした。
烏山は手帳をバッグに戻すと、部屋の様子を一通り確かめた。
泪子はパソコンを元通りに閉じ、廊下に出た。
烏山は泪子が靴をはいたの見届けると、大きなクシャミをしてから、部屋の電気を消した。

烏山は車に乗り込むと、車の暖房をつけた。
送風口から、冷たい風が車内に送られる。
泪子は灰皿にキャンディの棒を突っ込んだ。
「叔父さん。これからどうするの？」
烏山は車を発進させながら、
「そうだな。夕子という女性、それと『ラウンジ・ミッドナイト』という名前の場所を探すか。どちらも、もしかしたら依頼人が知っているかもしれない」
と、言った。
「地道な作業だなぁ」
と、泪子はつまらなそうに言った。
「探偵なんて、そんなもんだ」
烏山はオーディオを片手でいじりながら言った。
烏山は、ディスクに収録されている曲から、６曲目の曲を選んだ。
ディスクが回り、スピーカーからピアノの音が流れる。
音と音の間の『間』、不協和音のような音が特徴的だった。
「…これ、何て曲？」
と、泪子は訊いた。
「セロリアル…」
烏山は舌が回らなかった。

「セロリ？」
「違う。…セロニアス・モンクの『ラウンド・ミッドナイト』だ」
泪子は少し驚いたように、目を見開いた。
泪子は疑うような顔になって、
「…『狙い過ぎ』じゃない？」
と、正面を見据えている烏山に言った。
「偶然だ」
と言った烏山は、正面から顔をそらさなかった。

第6章：別

「…ふぅん。大変ね」
と、羽村明日香（ハムラ アスカ）は霧吹きを片手に言った。
烏山はクロスワード・パズルの雑誌を眺めている。
「手間取りそう？」
「…そうかもしれない」
「そうじゃないかもしれない？」
「そう言うことだ」
「そう」
烏山達が坂上冬彦のアパートを訪ねた日の翌日。
烏山は明日香の手伝いをしていた。
２人共、『Ｉｐａｎｅｍａ』のエプロンをしている。
烏山はカウンターに寄りかかり、明日香は小さな観葉植物に霧吹きを吹き付けている。
明日香は肩にかかった、髪を払った。
「…消えた男。謎の女。連絡のとれない依頼者。楽しそうじゃない？」
と、明日香は弾んだ声で言った。
烏山はカウンターの上の鉛筆を手に取った。
「そうでもないさ」
と、烏山は言った。
「今日はルイちゃんは？」
「まだ大学だ。学生だからな。５時に迎えに来いと言っていた」
明日香は楽しそうに笑うと、
「すっかり使われてるわね」
と言って、烏山をからかった。
烏山はクロスワードのマスに『パイナップル』と書き込んだ。
「今日はこれからどうするの？ルイちゃんを迎えに行くまで５時

間以上もあるけど」
「依頼人の住所を訪ねる。いないかもしれないが、何もしないよりはいい」
「ついでに、配達も頼んでいい？」
「分かった」
明日香は両手を腰に当てて、烏山の前に立った。
烏山は雑誌から視線を明日香に移した。
明日香は首を傾げて、烏山を見上げた。
「…寂さん。どうかしたの？」
と、明日香は真面目な顔で訊いた。
烏山は雑誌と鉛筆をカウンターに置いた。
烏山は目を瞑り、目頭をもみながら、
「…少し、嫌な予感がしてな」
と、ゆっくり言った。
明日香は霧吹きを烏山の胸に押し付けた。
烏山が、少し驚いたように目を開けると、明日香はにっこりと微笑んだ。
「不景気な顔してるからよ。ボーっとしてないで、手伝って。まだ時間はあるでしょ？」
烏山は軽く微笑むと、明日香から霧吹きを受け取った。

「ふぅん。大変だね」
入江理江（イリエ リエ）は割引券付きのフリーペーパーをめくりながら、興味の無さそうに言った。
「理江さぁ。ちゃんと話聞いてた？」
泪子は頬杖をついて、疑わしそうに理江を見つめた。
「聞いてたって。冷蔵庫に卵があったんでしょ？」

「そこは重要じゃないよ」
「じゃ、なんとかって名前の店だっけ？」
「それは重要かな」
「あ、この店安い！」
「どれ？」
そう言って、泪子は理江が指差したフリーペーパーのページを覗き込んだ。
昼の１２時を過ぎた学食は混み合っていた。
食べ物の匂いと香水の香りが入り混じる中、泪子達は窓際のテーブルに陣取っていた。
「…泪子さぁ。もっと合コン、出てくれないかな」
と、理江はウェーブのかかった髪をいじりながら言った。
「興味ないもん」
素っ気なく言って、泪子はペットボトルの紅茶を飲んだ。
「なくてもいいの。客寄せパンダでいいのよ」
「どういう意味？」
「アンタが参加するだけで、次回の男の質が上がるのよ」
「私は品質向上委員？」
「そんなとこね」
泪子は理江が広げていたフリーペーパーを取り上げた。
飲食店が掲載されているページをパラパラとめくり、
「理江が調べなくても、幹事なんか押し付ければいいじゃない」
と、泪子は理江に言った。
「いま調べてるのは、彼と飲みに行く所。合コンじゃないわ」
理江は髪の毛先を調べながら言った。
「彼氏がいるのに合コンって行くものなの？」
「彼、社会人だしさ。あんまり会えないしね。若いのに暇を持て余すのも不健康じゃない？」
と、理江は真剣な表情で毛先を見つめながら言った。
「げ。枝毛…」

と呟いた理江を眺めて、泪子は肩をすくめた。
泪子はフリーペーパーに視線を移し、何気なさそうにページをパラパラとめくった。
泪子はページをめくる手を止めた。
泪子は猫のような目を見開き、指をフリーペーパーの左隅に運んだ。
左側のページの下、左隅にある小さな記事。
バー、『ラウンジ・ミッドナイト』。
泪子はそのページの端を折り曲げ、
「…この店の可能性はあるって、叔父さんなら言うな」
と、呟いた。

烏山は、太田真紀子の住むマンションの前にあるコインパーキングに車を止めると、座席に座ったままでマンションの入口を眺めた。
８階建てのマンションで、自動ドアのガラス越しに郵便受けの並ぶロビーが見えた。
狭いロビーの先に黒い扉があり、扉の横の壁に鍵穴と数字の並んだ装置があった。
烏山は、助手席に置いてあった白いバラの花束を手に取って、車から降りた。
車に鍵をかけて、烏山は辺りをキョロキョロと見回した。
昼下がりの住宅街には、小さな子どもを連れた主婦の姿が目立った。
烏山は、真紀子のアパートに向かう主婦に視線を止めた。
その女性は、３歳くらいの男の子の手を引いて、仲良さそうに歌を歌っている。
烏山は距離をとって、その親子の後に続いた。

親子連れがアパートに入り、女性はドアの横の鍵穴に鍵を差し込んだ。
黒い扉が横に開いた瞬間、烏山はアパートに足を踏み入れ、女性が開けた扉を通った。
扉の前に、エレベーターがあった。
烏山がエレベーターが上に向かうボタンを押すと、ドアがスルスルと開いた。
烏山と、親子はエレベーターに乗り込んだ。
「何階ですか？」
と、烏山は４階に向かうボタンを押してから訊いた。
「５階です」
と、女性は答えた。
女性は片手にビニール袋、もう一方の手は男の子とつないでいる。
男の子は飛行機の玩具を振り回しながら、何事かわめいている。
女性が男の子をたしなめる様子を、烏山はぼんやりとした表情で眺めていた。
４階につくと、烏山はエレベーターから降りた。
エレベーターはマンションの真ん中を通っているため、通路は左右に伸びている。
烏山は左の通路に進み、端から2番目のドアの前に足を止めた。
烏山は『４０２・太田』と書かれたインターホンを押した。
ピンポーンという音が、部屋の中から漏れた。
反応は無かった。
烏山は３０秒ほど待ってから、もう一度インターホンを鳴らした。
反応は無かった。
烏山はドアノブに手をかけたが、鍵がかかっていたために開けることができなかった。
烏山は肩をすくめると、来た通路を戻った。
烏山はエレベーターのボタンを押した。
エレベーターが上から４階に降りてくる。

無人のエレベーターのドアが開き、烏山が乗り込むと、烏山の上着のポケットがブルブルと振動した。
エレベーターのボタンを押すと、烏山は上着の内側に手を突っ込んで携帯電話を取り出した。
片手で電話を開けて、烏山は電話に出た。
「はい」
「儲かってるか？」
と、烏山に電話をかけた人物は訪ねた。
「まぁまぁですね。どんな用ですか？渋川（シブカワ）警部補」
と、烏山は答えた。
「殺しがあった」
と、渋川は欠伸混じりに言った。
エレベーターの扉が開き、烏山はエレベーターから降りた。
「女だ。死んでからしばらくたってる」
「強姦の痕跡は？」
「まだ詳しくは分からんが、見たところ『突っ込み』の感じじゃないな」
烏山はマンションから外に出て、車に向かった。
「…おい、烏。何か知らんか」
と、渋川は訊いた。
「何も」
「そうか」
「わざわざ、そんな事を確認に？」
「まぁな。…人の縁ってのはなかなか切れんからな」
渋川は、今日の天気でも話すような調子で言った。
烏山は車に寄りかかり、花束を見つめた。
「…しかし、何も知らないんですから、仕方ないでしょう」
「まぁ、そう言うな。害者の名前には聞き覚えがあるかもしれんだろう？」
「名前は？」

「谷口夕子（タニグチ ユウコ）」
「ユウコ？」
「ああ。夕方の夕に、子どもの子だ」
「残念ですが、知りませんね」
「…そうか。分かった。もし、何か分かったら連絡くれ」
そう言って、渋川は電話を切った。
烏山は電話を閉じた。
「…可能性はある、か」
烏山はそう呟き、車のドアを開けた。

第7章：酒

「それじゃ、殺されたのって、私達の探してる夕子さんに間違いないんだ」
「ニュースで顔写真が出ていた。間違いないな」
「参ったね」
「参ったな」
立体駐車場の中から、烏山と泪子が姿を現した。
烏山は黒いスーツに青いネクタイ、泪子はダウンジャケットにジーンズ姿だった。
坂になっている道を、烏山達は下っていった。　週末の繁華街。
ネオンの明かりの下は、人が混み合っていた。
歩道の横を、ヘッドライトをつけた車がノロノロと走っている。
周りのざわつきに負けないくらい大きめの声で、烏山は、
「泪子の見つけた店はこっちでいいのか？」
と、訊いた。
泪子は爪先立ちになって、烏山の耳元に顔を近づけた。
「こっちで合ってるよ！」
「大体の場所は分かるが、店が多いからな」
「『大人の隠れ家的なバー』らしいよ。もしかしたら、見つからないかもね」
「…見つかったら隠れ家じゃないからな」
「そのとおり！」
烏山達は通りを曲がった。
沿道には飲食店や様々な業種のショップが並んでいる。
幾分か人波が落ち着いた道を歩きながら、
「もうクリスマスだね」
と、泪子は感慨深そうに言った。
烏山は立ち並ぶ店に視線をやった。

泪子の言葉通り、あらゆる店がクリスマス・カラーに彩られている。
「…ここって、商店街なんだよね」
と、泪子が思い出したように言った。
烏山は飲食店の客引きをかわしながら、
「そうだ。イメージとは違うだろうな」
と、言った。
泪子は看板を眺めながら、
「うん。違うね」
と、力強く言った。
「泪子。『ラウンジ・ミッドナイト』の場所を詳しく教えてくれないか」
泪子はジャケットのポケットをあさり、フリーペーパーの切り抜きを取り出した。
「これ」
と言って、泪子は烏山に切り抜きを渡した。
「どれ」
と言って、烏山は泪子から切り抜きを受け取った。
烏山はゲームセンターの壁に寄りかかると、目を細めて、切り抜きを見つめた。
「…ねぇ、叔父さん。分かった？私、大体の方向しか分からなかったんだけど」
と、泪子はゲームセンターの景品を眺めながら言った。
「…分かった」
「どこ？」
泪子は烏山に視線を向けた。
烏山は右手を上げて、ゲームセンターの向かい側のビルを指差した。
２階の窓ガラスの青い文字。
窓ガラスには『ｌｏｕｎｇｅ・ｍｉｄｎｉｇｈｔ』と書かれてい

た。
「隠れ家が…」
と、泪子は拍子抜けした様子で言った。

烏山達は、小さなエレベーターで2階まで上がった。
薄暗い照明の下に、木製のカウンターや、カウンターと同色のフローリングがぼんやりと見える。
丸いテーブル席が窓際に4つ、店の奥にはボックス席があった。
カウンターにいた茶髪の店員に、烏山は人数を告げて奥のカウンター席に座った。
泪子は烏山の左隣の席に腰を下ろした。
「ご注文は？」
先ほどの店員が烏山達に尋ねた。
若い男で、右耳のピアスが薄明かりで鈍く光っている。
「ウォッカ・トニック」
と、泪子はジャケットを脱ぎながら言った。
「カルーア・ミルク」
と、烏山は小物入れを取り出して言った。
泪子はジャケットを隣の席に置くと、店内を見回した。
午後6時前の店には、烏山達の他に客はいなかった。
烏山はキャンディを口に含むと、灰皿を引き寄せて、その中にキャンディの包み紙を広げた。
店員はカクテルを作り終えると、グラスを烏山達の前に置いた。
「店員は君1人？」
と、烏山は男に話かけた。
「そうですねぇ。もう少ししたら、増えるんスけどぉ」
と、店員は語尾を伸ばし気味に言った。

「…実は、私はこういう者でね」
烏山はそう言って、男に名刺を渡した。
男は名刺を眺め、
「探偵ぇ？」
と、素っ頓狂な声を出した。
「少し、訊きたいことがあるんだが…。いいかな？」
「何があったんスか？殺人事件？」
と、身を乗り出して、男は訊いた。
「ただの人探しさ。…この人、この店に来たことあるかい？」
烏山は坂上冬彦の写真を手渡しながら、訊いた。
泪子は、退屈そうな表情でグラスに口をつけた。
「…あぁ。この人ならよく来てますよ」
と、男は写真を見て答えた。
「今日と同じように、土曜日だね？」
「あぁ。そういえば、土曜日が多いですね」
「最近は？」
「いや、見てないですねぇ」
「いつも1人？」
「いや、綺麗な女の人と」
「泪子」
泪子は烏山に声をかけられると、携帯電話をいじって、谷口夕子の画像を表示させた。
「この女（ヒト）？」
携帯電話の画面を見せて、泪子は訊いた。
男は目を細めて、画面を睨みつけた。
「どう？」
「…この女（ヒト）です！間違いないス」
と、男は泪子に答えた。
泪子は烏山を見た。
烏山は表情を変えずに、

「それじゃ、いつも2人でここに来ているんだね？」
「はい。…あ、いや！」
と言って、男は大袈裟に手を振った。
「…男の人の方は分かんないスけど、女の人はよく友達っぽい人と来てますねぇ」
と、男は思い出すように顔をしかめて言った。
烏山はキャンディを灰皿の紙の上に置いた。
「団体で？」
「いや、1人ですね」
「男性？それとも女性？」
「女の人っスね」
「どんな女（ヒト）かな？特徴は？」
男は唸りながら、頭を掻いた。
「…綺麗な女（ヒト）でぇ。髪は長めでぇ。背も高い方かなぁ。あとはぁ…。唇が色っぽいなぁ」
「唇？」
と、烏山は男に聞き返した。
「はい。こう、ふっくらしてて、何だか色っぽくて…」
と、男はニヤニヤしながら言ったが、泪子に睨まれて、慌てたように表情を戻した。
「…最後に訊きたいんだが、その3人が一緒になったことは無いかい？」
「…俺は見てないですね」
「…分かった。ありがとう」
そう言って、烏山は小物入れから板状のガムを1つ取り出して、男に渡した。
男は不思議そうな表情でガムを受け取った。
エレベーターの横の階段から4、5人のサラリーマンらしい男達が店に入ってきた。
男はガムをポケットに突っ込むと、烏山達から離れた。

「…叔父さん。さっきのガム、何？」
と、泪子は訊いた。
烏山は窓際のテーブルを移動させている団体を眺めて、
「ただのガムじゃない。中身はな」
と、言った。
泪子はウォッカ・トニックを一口飲んだ。
「…つまり、山吹色のガム？」
「古典的だな」
「お主もワルよのぅ」
と、泪子は声を低くして言った。
「いえいえ、お代官様こそ」
と、烏山も声を低くして言った。
「ところで越後屋。谷口夕子さんとこの店に来ていたのは、太田真紀子さんだと思うか？」
と、泪子は声の調子を変えずに言った。
「恐らくは」
烏山も声の調子を変えなかった。
「確かに、あの唇は色っぽい」
「…まぁ、やっと繋がってりらっら…」
と、烏山は声の調子を戻して言った。
泪子はつまらなさそうに声の調子を戻した。
「…やっと繋がってきた？」
「…そうだな」
そう言って、烏山は渋い顔をしてカルーア・ミルクを飲んだ。

第8章：話

烏山達は1時間程『ラウンジ・ミッドナイト』に居座った後、向かいのゲームセンターに向かった。
小脇に大きなぬいぐるみを抱え、はしゃぎながらクレーンゲームをしている泪子を烏山が眺めていた時、烏山の携帯電話が鳴った。
烏山は騒音を避けるようにして、ゲームセンターから出た。
「はい」
「もしもし。烏山さんですか？」
「そうです。…太田真紀子さんですか？」
烏山の電話の相手は短い沈黙の後、答えた。
「…はい」
「よかった。連絡が取れなくて心配していたんですよ」
「あの…。これから事務所に伺ってもよろしいでしょうか？」
と、真紀子は思い詰めたような調子で訊いた。
烏山は腕時計をチラリと見た。
午後7時33分。
「分かりました。では1時間後。8時半に事務所でよろしいですか？」
「8時半。分かりました」
「お待ちしています」
烏山は電話を切ると、泪子のところに戻った。
泪子は烏山に気付くと、
「見て、叔父さん！2個目！」
そう言って背伸びをすると、ぬいぐるみを烏山の顔に押し付けた。
泪子の顔は、アルコールの影響でほんのりと赤い。
烏山は押し付けられたぬいぐるみを取り上げた。
ピンク色のクマのぬいぐるみだった。
取り上げたぬいぐるみを肩に乗せて、

「帰るぞ」
と、烏山は言った。
「え～！」
と、泪子はつまらなそうに声をあげた。
「なんでさ！
「…酔いがさめるまで、ゲームセンターにでもいるか」
って、言ってたくせに！」
と、泪子は烏山の物真似で抗議した。
「俺はさめた」
「私はまださ」
「まださめないか？」
「しばらくさめない」
「それは困った」
そう言うと、烏山は泪子に背中を向け、出入り口に向かって歩きはじめた。
泪子はぼんやりした様子で烏山の背中を見つめていたが、視線を烏山の肩に乗っているクマに視線を移すと、ハッとした表情になった。
「叔父さん！ぬいぐるみ返して！」
と大声を出して、泪子は烏山に向かって走っていった。

烏山は、事務所の近くにある駐車場に車を止めると、腕時計を見た。
８時２１分。
烏山は助手席に座っている泪子を見やった。
泪子は、白いクマとピンクのクマを抱えて気持ち良さそうに寝息をたてている。

烏山はため息をついて、車から降りた。
鍵をして、助手席側のドアに回り、ドアを開けて、烏山は泪子を抱き上げた。
泪子は抱き上げられると、軽く唸ったが、目は覚まさなかった。
烏山はドアを足で閉めて、駐車場から離れた。
駐車場から事務所のあるビルまで、３０ｍ程の距離がある。
烏山は泪子がぬいぐるみを落とさないように、気をつかいながら歩いているようだった。
ビルに近づくと、半ばシャッターを降ろしている『Ｉｐａｎｅｍａ』の店の中から、明日香が姿を現した。
白いハイネックのセーターにジーンズ姿の明日香は、少し驚いたような顔をした。
「どうしたの？そちらのお姫様は」
と、明日香は訊いた。
「眠っているだけだ。本当は家に帰したかったんだが、間に合わなかった」
「お客様なら上にいるわよ」
そう言って、明日香はビルの２階を指差した。
２階の烏山探偵事務所には明かりがついていた。
「…泪子についていてくれないか。このままじゃ、上に連れていけない」
「しょうがないな」
「迷惑ついでに、もう１つ。車の鍵をかけ忘れた。頼めるかい？」
明日香は腕を組むと、軽く首を傾げた。
「面倒くさいな」
と、明日香は言った。
「頼む」
「仕方ないな。とにかく、お姫様を運びましょう」
そう言って、明日香は『Ｉｐａｎｅｍａ』の中に入っていった。

烏山は泪子を抱き直すと、明日香の後に続いた。

「お待たせしました」

烏山は事務所のドアを開けると、目の前のソファに腰掛けている女性の背中に向かって言った。

太田真紀子は振り返って烏山を見た。

「いえ、私も早く来すぎてしまって…」

と、真紀子は慌てたように言った。

「しかし、待たせてしまった事実に変わりはないでしょう？申し訳ありません」

烏山は軽く頭を下げると、デスクに向かい、デスクの上に置いてあるエアコンのリモコンを手に取った。

暖房をつけると、烏山は部屋の反対側にあるキッチンスペースに向かった。

「あ、お構いなく」

冷蔵庫を開けてペットボトルを掴んだ烏山に、真紀子は言った。

烏山はペットボトルの水をやかんに移しながら、

「…喋ると喉が渇きます。これから必要になるでしょう。…ココアと紅茶、どちらがよろしいですか？」

と、真紀子に訊いた。

真紀子は少し思案した様子で、

「…それじゃ、ココアを」

と、言った。

「…それでは、お話を伺いましょう」

湯気のたつカップを真紀子の前に置いて、烏山は切り出した。

烏山は真紀子を見つめた。

今日の真紀子は髪をまとめていなかった。

ベージュのコートを着込み、下を向いて、指を組み合わせている。
少しの沈黙の後、真紀子は語り始めた。
「…ニュース、見ました？工場で死体が見つかったってニュースです」
「…すぐ隣の区ですね。確か、被害者の名前は谷口夕子さん」
と、烏山は言った。
「…はい。もしかしたら、もうご存知かもしれないですけど…」
「谷口夕子さんは坂上冬彦さんの恋人、という話ですか？」
烏山は真紀子の言葉を遮って、訊いた。
真紀子は顔をあげて、驚いた様子で烏山を見た。
烏山は言葉を続けた。
「その事について、私も訊きたかったんです。しかし、連絡がつかなかった。…教えて頂けませんか。どうして嘘をついたんです？」
真紀子は顔を伏せ、コートの端を握りしめている。
「…あの男を探し出してもらうには、あの言い方が一番楽だと思ったんです」
と、真紀子は小さい声で言った。
「…私、夕子とは大学の時から友達でした。社会人になってからも、ずっと…」
烏山は黙って、真紀子の話を聞いていた。
テーブルの上のカップからは、まだ湯気がたっていた。
「…夕子から、坂上のことは、よく聞いていました。写真も見せてもらって、顔も知ってました」
真紀子は握りしめたコートの端を神経質そうにいじっている。
「…5日前、私、夕子の家に行ったんです。約束してて。…でも、夕子はいませんでした。鍵もかけてませんでした」
真紀子は、両手でカップを持つと、口に運んでココアを一口飲んだ。
「…私、おかしいなって、思ったんです。でも、とりあえず、待ってみようと思って、部屋にあがったんです。…それで、なんとな

く、窓から外を眺めたんです。その窓から、あの工場が見えたんです。すぐ近くだったので、よく見えるんです。工場のすぐ近くに街灯があって、誰か通ったんです。やけに、キョロキョロしてて…。その人、背中を向けてたんですけど、横顔は見えました」

真紀子は両手でカップを包むようにして持ち、カップを見つめた。

「…男でした。それで、その男の顔が坂上にそっくりだったんです」

第9章：黒

「で、その後どうなったの？」
と、泪子は勢い込んで訊いた。
「…彼女は部屋にあった写真を手にとって、男を追いかけた。だが、見失った。その後、部屋に戻ったが、谷口夕子は帰っていなかった。1時間程待って、結局彼女も帰ったそうだ。鍵も無かったからかけずに帰ったらしい」
そう言った烏山は、目を閉じて目頭を揉んでいた。
「その間、太田さんは夕子さんに連絡はしたの？」
「したそうだ。当然、連絡はつかなかったらしい」
ふぅん、と言って、泪子はソファに座り直した。
太田真紀子が帰った後の事務所には、烏山と目を覚ました泪子、明日香がいた。
明日香はやかんでお湯を沸かしながら、
「今の話だと、その男の人が怪しいわね」
と、独り言のように言った。
「今のところはな」
「今のところはね」
と、烏山と泪子は言った。
泪子は首筋に手をやって、
「…坂上が犯人だとすると。何故いなくなったかは分かるね」
と、言った。
「逃げた、ってこと？」
と、明日香は泪子に訊いた。
「その通り！」
と、泪子は明日香を指差して言った。
烏山はデスクの椅子に座ったまま、何も言わなかった。
突然、デスクの上の電話が鳴り出した。

烏山は受話器を取った。
「はい。烏山探偵事務所」
「烏。何を嗅ぎまわってる」
烏山の電話の相手は、言った。
「何のことですか？渋川さん」
「とぼけるな」
渋川は不機嫌そうな調子で続けた。
「害者の周りを洗ったら、何人か男が出てきた。その内の1人を調べたら、会社に来てない。アパートにもいない。しかも、アパートの鍵は開けっ放しだ」
烏山は無言で、相手の次の言葉を待っているようだった。
泪子と明日香は烏山のほうを見つめている。
やかんからは、白い水蒸気が吹き出ていた。
「しかしだ。昨日、会社にその男の『いとこ』って娘が訪ねてきたんだと。それと、アパートの周辺、聞き込んだら証言が出たよ。背の高い男と、白い上着着た女が男のアパートに来てたってな」
烏山は口を開いた。
「…それが俺だとは限らないでしょう？」
「ところがな。人相訊いたら、お前にそっくりなんだよ」
「他人の空似かもしれませんね」
「そうかもしれんな。…よし。それじゃ、お前の姪っ子貸してくれ。その男の会社に連れて行く」
烏山は目頭を揉むのを止めて、椅子の背もたれに寄りかかった。
「…烏。もう一度訊くぞ。何を嗅ぎまわってる？」
「…人探しですよ。依頼人については言えません」
と、烏山は低い声で言った。
「探してるのは坂上冬彦って野郎か？」
「そうです」
「そうか。詳しく聞かせろ。そっちに行く」
「話すほどのことなんてありませんよ」

「世間話をしたいだけだ。２０分で着く」
そう言うと、渋川は電話を切った。
烏山は受話器を置いた。
「どうしたの？」
と、泪子は心配そうに訊いた。
烏山は泪子に答えずに、明日香に向かって、
「明日香さん。すまないが、泪子を送ってくれないか」
と、言った。
明日香は小首を傾げて、
「別にいいけど。どうして？」
と、訊いた。
烏山は明日香と泪子を見やった。
「…恐いオヤジが来る。怒られたくはないだろう？」
そう言ってから、烏山はデスクの上の小物入れに手を伸ばした。

明日香は泪子の家の前に黄色のアルトハッスルを停めると、泪子に言った。
「ルイちゃん。着いたわよ」
泪子は両腕に抱えたぬいぐるみに顔をうずめて、低く唸った。
「どうしたの？」
首を傾げて、明日香は訊いた。
泪子は顔を上げて明日香を見た。
「明日香さん。坂上冬彦のアパートに行ってくれませんか？」
明日香は、泪子の言葉に目を丸くした。
「どうしたの？いきなり」
「坂上が犯人なら、何か証拠になりそうなものがあるかもしれません」

「でも、警察がもう調べたんじゃない？」
泪子は気づいたように、
「あ、そうか」
と、言った。
「それに、鍵も閉まってるわよ。きっと」
「…そうかぁ」
「そうよ」
そう言って明日香は、しょぼんとした様子の泪子の頭を撫でた。
「…あとは、警察が何とかしてくれるわよ。今日はもう帰りなさい」
と、明日香は泪子に優しく言った。
「…はい」
そう言って、泪子は車のドアを開けた。
「お休み」
と、明日香はドアを閉めた泪子に向かって言った。
「お休みなさい」
と言って、泪子はぬいぐるみを抱えたまま頭を下げた。
明日香は車を走らせた。
泪子は、アルトハッスルが角を曲がってテールライトが見えなくなるまで見送った。
泪子は自分の家を見上げた。
２階建ての建て売り住宅。
周りには似たような形の家と、小さなアパートが建ち並んでいる。
泪子はため息をついて、玄関に向かった。

１０分後、泪子は再び家から出てきた。
泪子は黒いジャンパーに黒っぽいジーンズ、黒のスニーカーを身につけていた。
泪子は携帯電話を取り出して、画面の時計を見た。

９時５７分。
赤いキャスケット帽を被ると、泪子は猫のような瞳を楽しそうに細めた。
「まだ電車は動いてるもんね」
そう呟いて、泪子は携帯電話をジーンズの尻ポケットに押し込み、歩き始めた。

烏山が渋川から電話を受けてから２０分もたたない間に、渋川は烏山探偵事務所のソファに座っていた。
渋川は茶色のよれよれのコートを羽織り、眠そうに欠伸をした。
「…よし。知ってること全部話せ」
白髪だらけのボサボサの髪を掻いて、渋川は言った。
烏山は話した。
坂上冬彦の会社に行ったこと。
坂上冬彦のアパートに行ったこと。
『ラウンジ・ミッドナイト』に行ったこと。
坂上冬彦の恋人が谷口夕子だと知ったこと。
太田真紀子のことと、真紀子の話は話さなかった。
聞き終わると、渋川は退屈そうに言った。
「…今のところ、俺たちの調べたのと変わらんな」
烏山はキャンディを頬張り、
「変わらないはずですよ。何週間も前から調査してるワケじゃない」
と、言った。
渋川はテーブルの上の紅茶をすすった。
「…まぁ、死人が出て、その男がいないとあっちゃ、疑うのは当然だよな」

「可能性の1つではありますね」
「お前に言わせればそうだろうな。それで、依頼人についてだが」
「守秘義務があります」
と、烏山は渋川の言葉を遮って言った。
渋川は大袈裟に欠伸をした。
「…だろうな」
「俺から聞き出さなくても、被害者の周りを洗えば分かることですよ」
「手間かけさせるな」
烏山はキャンディを口に入れたまま、湯気のたっていない紅茶を飲んだ。
「…被害者に男は、何人もいたんですか？」
と、烏山は訊いた。
渋川はソファに深々と座って、
「俺にはロクな情報（モン）よこさねぇで、自分は聞き出そうってか？」
と、頭を掻いて言った。
烏山はカップを静かに置いた。
「ただでさえ、お前は住居侵入罪だ。俺が上に言ってないから、ここにいられる。忘れるなよ」
そう言って、渋川はソファからゆっくりと立ち上がった。
渋川はコートのポケットに片手を突っ込み、ドアの方にブラブラと歩いていった。
渋川はドアノブに手をかけると、振り返って烏山を見た。
「…何か分かったら連絡しろ。何か知りたかったら連絡よこせ。殺し絡みだから『高い』けどな」
烏山はキャンディを口から出して、渋川の顔を見た。
「…相変わらずですね」
と、烏山は言った。
「まぁな。だから出世できねぇんだ」
そう言って渋川はドアを開けると、事務所から出て行った。

烏山は渋川の足音が聞こえなくなるまで、爬虫類のように動かなかった。

第１０章：鍵

泪子は駅の改札を出ると、駅に面している国道に沿って、東に向かって歩いていった。
泪子はジャンパーのポケットで両手を暖め、鼻歌を歌いながら呑気に歩いている。
ジーンズの尻ポケットには携帯電話と、泪子が持つには大きすぎる筒状の懐中電灯を突っ込んでいた。
国道を真っ直ぐ進むと、都道とぶつかった。
泪子は国道に面しているコンビニエンス・ストアに入り、缶のお汁粉を買った。
コンビニエンス・ストアを出ると、国道を渡り、都道に沿って北に進んだ。
泪子は両手の掌の間で缶を転がしながら、
「…猫舌は辛いなぁ」
と、ため息混じりに呟いた。
１１時過ぎの通りは、週末のためか交通量は少なくはない。
泪子は街灯と車のライトで道を確かめながら、歩道を進んだ。
坂上冬彦のアパートへ向かう路地に道が曲がる所で、泪子は足を止めた。
通り沿いの植え込みの下の方に、何かが光を反射して光っている。
泪子はしゃがみ込んで、それを拾い上げた。
赤いプラスチックの破片。
破片という表現が相応しく、所々先端が尖っている。
泪子は赤い破片をしげしげと眺め、
「…北海道？」
と、独り言を言って、ポケットに入れた。
泪子は路地に入り、坂上のアパートに向かって進んだ。
坂上のアパートは路地に入って、２０ｍ程の所にあった。

泪子はアパートの前に立つと、まだ飲んでいないお汁粉をジャンパーのポケットに入れて、ジーンズのポケットから懐中電灯を抜き出した。
泪子は足音をたてないように気を使っている様子で、階段を3階まで昇っていった。
部屋の明かりが漏れているドアの前を通りながら、泪子は、
「…早く寝なさいよ」
と、愚痴った。
泪子は廊下の突き当たりのドアに着くと、ドアと壁の隙間に視線をやった。
ドアが、微かに開いている。
泪子は表情を硬くして帽子を被り直した。
泪子はポケットから黒い手袋を取り出して、両手にはめた。
泪子は壁にぴったりと身を寄せて、左手をドアノブに添え、右手で懐中電灯をしっかりと握り締めた。
泪子は隙間に耳を当てて、耳をすましているように、目を細めた。
部屋の中から、ゴソゴソと物音が聞こえてくる。
泪子は周りをサッと見回した。
隣のドアが開く様子はない。
アパートの前の道に、車のライトが広がっているのが、泪子の位置から見えた。
一度深呼吸をしてから、泪子はドアを勢い良く開けて、スニーカーを履いたまま、部屋の中に駆け込んだ。
ドアが開き、壁にぶつかる音。
泪子の勢いづいた足音。
何かが慌てたように動く音。
部屋の中の物が倒れる音。
「うわっ！」
と、声がしたかと思うと、何か重量のあるものが床に叩き付けられる音がした。

泪子は懐中電灯をつけて、部屋の中を照らした。
部屋の中は昨晩よりも乱雑になっているように見える。
デスクの上は散らかり、パソコンは無くなっている。
コンポやＤＶＤプレーヤー等も、昨晩の位置にはなかった。
泪子は、ベランダへ続くガラス戸の前にうずくまっている人物を照らした。
髪が短い、無精髭の男だった。
年は若く見える。
足を電化製品のコードに引っ掛けたらしく、右足にコードが絡まっている。
靴は履いていない。
頭を床にぶつけたらしく、口はだらしなく開き、半ば開いた目は白目をむいている。
泪子は恐る恐るといった様子で男に近づき、男のそばにしゃがみ込んだ。
顔をまじまじと見つめて、泪子は呟いた。
「…誰？」
泪子は男の顔を覗き込んだ。
「泪子」
と、泪子に呼びかける人物がいた。
泪子は驚いたように、自分が土足で入ってきたドアの方を振り返った。
開きっぱなしのドアに誰かが立っている。
外の街灯のせいで、泪子の位置からは顔が見えない。
その人物は走ってきたように、肩で息をしている。
泪子は懐中電灯をその人物に向けた。
光に照らされて、烏山は眩しそうに目を細めた。
「叔父さん…」
「…家に帰ったら、親に挨拶ぐらいはしたほうがいい。特に明治（アキハル）さんみたいなタイプには、な」

烏山は靴を脱いで、部屋に上がった。
泪子は烏山の足元を照らすように、懐中電灯を下げた。
「…靴は脱いだほうがいいな」
と、烏山は泪子の残した足跡を眺めて言った。
「非常事態だもん」
「非常事態か」
「その通りさ」
烏山は泪子の横に立つと、気を失っているらしい男を見下ろした。
「…坂上冬彦ではないな」
「だよね。それじゃ、この人、誰？」
そう言って、泪子は男を指差した。
「…さしずめ、火事場泥棒ってとろろろろう」
泪子は少し思案した様子で、
「火事場泥棒？」
と、疑わしげに聞き返した。
烏山は、自分の足元に転がっている、大きなボストンバッグを爪先でつついた。
泪子は懐中電灯で、ジッパーが開いているバッグを照らした。
中に固く、重さのあるものが入っているらしく、バッグはいびつな形に変化している。
開いたジッパーの間からノートパソコンの一部がはみ出していた。
泪子は呆れたように言った。
「なるほどね」
烏山はしゃがみ込んで男の腕を掴むと、自分の肩に回した。
烏山は男を背負って、顔色一つ変えずに立ち上がった。
「どうするの？」
泪子は烏山につられたようにして、立ち上がった。
「…車に運んで、事情を聞く」
「ここは、このままでいいの？」
泪子は懐中電灯で部屋を照らしながら訊いた。

「今のところな」
歩きながら烏山は言った。
「了解」
泪子は、烏山の後についていった。

烏山は男の足を車の外に出して、助手席に座らせた。
ドアは開きっぱなしになっている。
泪子は、やっと飲める温度になったようで、缶のお汁粉をチビチビと飲んでいる。
烏山は男の顔を自分の方に向かせると、男の左頬に向かって、平手打ちを食らわせた。
乾いた音がアスファルトの道や、コンクリートの塀に反響した。
男の瞼がピクピクと、痙攣したように動いた。
烏山はもう一度、平手打ちを食らわした。
泪子は、痛みを感じているかのように顔をしかめた。
烏山が3発目の平手打ちを食らわせたところで、男はぼんやりと目を開けた。
男は何も考えていないように、烏山の顔を見つめている。
烏山は容赦なく、男の頬を叩いた。
男は驚いたように、ゆっくりと目を見開いた。
「…名前は？」
いつもと変わらない、落ち着いた調子で烏山は訊いた。
男は腫れた頬に手を触れた。
「…今村浩太（イマムラコウタ）」
と、今村ははっきりとしない発音で言った。
「あそこで何をしていた？」
「…あんた、警察？」
と、今村は頭がはっきりしてきたらしく、先ほどよりも歯切れよく訊いた。

「警察ではない。だが、考え方によっては、警察よりも厄介だ」
と、烏山は男を見つめて言った。
「…あの、親には言わないでくれませんか？」
今村は身を乗り出して、悲痛な声を出した。
烏山は顔色を変えない。
「何をしていた？」
今村は力が抜けたように、うなだれた。
男はポツリポツリと、話し始めた。
「…今日、刑事が来て、あの部屋の人について訊かれたんです。何か知らないかって。俺、同じアパートの1階に住んでるんで。…俺、顔も見たことなかったから、知らないって言ったんです。それで…、その後、俺、訊いたんです。何かあったのかって。そうしたら、その部屋の人がいなくなったって…。それで、俺、試しに行ってみたんです」
「部屋の鍵は開いていたのか？」
「…いえ、かかってました」
烏山は目を細めた。
「どうやって入った？」
今村はためらいがちに言った。
「…1週間ぐらい前、俺、キーケースを拾ったんです。そこの…」
そう言って、今村はコインパーキングの前を通る道が、大通りにぶつかるところを指差した。
泪子がアパートに来るのに、曲がってきたところだった。
「…そこの角で。それで、ケースに4つぐらい鍵があって。その中の1つが、俺のアパートの鍵に似てて。だから、まさかとは思ったんですけど、試してみたんです」
「それが当たったワケだな？そうして、空き巣の真似事をしたのか」
烏山は相変わらずの調子で訊いた。
今村は力が抜けたように、

「…はい」
と、小さな声で呟いた。
烏山は上着の内側に手を入れて、
「…よし。キーケースを渡しなさい。それから、あの部屋に戻って、綺麗に片付けろ。何も持ってくるな」
と、今村に言った。
今村は烏山を見上げた。
「早くしろ」
「…はい」
今村はよろよろと立ち上がり、ジーンズのポケットから革のキーケースを取り出して、烏山に渡した。
「行け。電気はつけるな」
烏山の言葉に頷き、今村は斜め向かいのアパートに向かって走っていった。
泪子は烏山に近づいた。
「…警察に言うの？」
泪子は、控え目に訊いた。
烏山はキーケースをスラックスのポケットに入れて、上着からキャンディを取り出した。
「訊かれたらな」
「訊かれなかったら？」
「言う必要がないだろう？まぁ、今村君にはたっぷり脅しをかけておくが」
泪子はお汁粉を飲んだ。
「…よく、私がここにいるって分かったね」
「明治さんから連絡があった。帰ってないってな。だから、明日香さんに訊いたんだ。そうしたら、ころりってりら…」
烏山は包みを剥がして、キャンディを口に運んだ。
「ここに来たいって言ってた？」
「そうだ」

「…怒ってる？」
と、泪子は恐る恐るといった様子で訊いた。
「怒られたいのか？」
と、烏山は泪子に訊いた。
「怒られたくはないけど…」
「それなら、怒らない。が、明治さんには謝っておけ。…連絡してきたとき、可哀想なくらい錯乱していた」
泪子はしゅんとした様子で小さく頷いて、お汁粉を一口飲んだ。

第１１章：報（前書き）

掲載まで時間がかかってしまい、申し訳ありません。深くお詫びします。

第11章：報

「叔父さん。やりすぎだったんじゃない？」
「…何のことだ？」
「さっきの人のこと」
セロニアス・モンクのピアノが流れる、烏山の車の中。
坂上冬彦の部屋に侵入していた今村浩太を解放し、烏山は車を泪子の家に向かって走らせていた。
時計は1時を6分過ぎたところだった。
助手席に座り、帽子を両手でいじりながら、泪子は続けた。
「顔、ひっぱたいたじゃない」
「あれはしかたないんじゃないか」
と、烏山は素っ気なく答えた。
「それにさ、結局自分も部屋に入ってたじゃない」
「それは、坂上の情報が欲しかったからだ」
泪子は疑わしそうに烏山を見つめる。
「だから、撮影会だったわけ？免許証とか書類とか？」
烏山は泪子をチラッと見やる。
「そうだ。本来なら前に忍び込んだ時にやるべきだった。…失敗した」
「さっきの人の身分証の撮影とかは？」
「…念のためだ」
「念のため？」
泪子は不思議そうに聞き返した。
「…本当に坂上と何の関係もないのか。接点は同じアパートということだけなのか」
烏山は静かに答えた。
信号機が赤を示して、烏山の車は停車した。
泪子達の目の前を、車が横切る。

泪子は言った。
「…つまり、可能性ってこと？」
「そうだ。…確率は低いかもしれないが、な」
ふぅんと言って、泪子はシートに深く座り直したが、何かに気がついたように急に体を起こした。
「叔父さん！」
大きな目を更に見開き、大声を出した泪子を、烏山は見た。
「…何だ？」
「鍵！鍵はどうしたの？」
「坂上の？」
「坂上の！」
「持ってるが？」
「そうじゃなくて！あの人、鍵を拾ったのは1週間くらい前って言ってたよね？」
「そうだ」
「おかしいよ！坂上が会社に来なくなったのは、確か1週間以上前。つまり、2週間前に近いワケ」
泪子は首筋に右手を当てて、真面目な表情で続ける。
「それで、太田さんが坂上を見たって言ってるのは5日前。いや、もう6日前か。そうだよね？」
と言って、泪子は烏山を見た。
烏山は視線を正面の信号機に向けたまま、
「そう言っていたな」
と、相づちを打った。
「太田さんが見かけるまでの数日間、坂上はどこにいってたの？」
泪子は独り言にしては大きな声で言うと、眉間にシワを寄せた。
信号機が青く点灯し、烏山は車をスタートさせた。
「鍵もないのに」
「…鍵を落としたのは、太田さんが坂上を見かけた後だったのかもしれない」

泪子は、口を開いた烏山を見つめた。
「それに、太田さんが見た男が坂上冬彦ではない場合も考えられる。…どちらにせよ、連絡がとれなくなった後の坂上の行動は気になるところだな」
「でしょ？」
と、泪子は得意気な顔をして言った。
「…しかし、泪子。忘れるなよ。俺達の仕事は坂上冬彦を探すことであって、殺人事件の犯人を探すことじゃない」
烏山は泪子の方を少しも見ずに、淡々とした口調で言った。
「…分かってるよ」
と、泪子はつまらなそうに言って、流れていく街並みを見つめた。

日曜日。
自室のベッドの上に丸くなっていた泪子は、カーテンの隙間から漏れる日光から逃れるようにして、ベッドから転がり落ちた。
ドタンと音をたてて転がり落ちた泪子は、しばらくの間、落ちたままの格好をくずさなかったが、やがて何事か呻きながら、ゆっくりと身を起こした。
服装は昨晩の黒ずくめのままだった。
寝ぼけ眼で寝癖のついた頭をなでながら、泪子は周りをキョロキョロと見回す。
６畳ほどの大きさの部屋。
泪子からみて右側にドアのある壁があり、ドアの横には木製の背の高い本棚が並んでいる。
本棚の上半分にはぬいぐるみが無造作におしこまれている。
下半分に並んでいる本は大多数がマンガ本だった。
左側の赤いカーテンの向こうには、ベランダへ続くガラス戸があ

る。
泪子の正面にはテレビラックに並んだテレビやコンポが積まれた棚があった。
泪子はベッドの上に上半身を乗り出して、枕元を手探りした。
顔はクシャクシャになった掛け布団に押し当てている。
枕の下に隠れていたテレビのリモコンを探り当てると、泪子はリモコンを持った左腕だけをテレビに向けて、テレビの電源を入れた。
ブォォンとした起動音と共にテレビ画面が明るくなっていく。
「…は事件の関連性があるとみて、調査を続けています」
住宅街の道に数人の警察官が這いつくばる風景から、女性キャスターの姿に映像が切り替わる。
「次のニュースです。昨夜9時頃、警視庁に「人をはねた」と証言する男が出頭し、現在取り調べを受け…」
泪子は顔をテレビに向けて、チャンネルを切り替えた。
先程のチャンネルと同じような映像が流れていた。
泪子は顔の右半分を布団にうずめたまま、画面を眠そうな目で見つめている。
「…と事故の両方の可能性を考え、捜査を続けています」
住宅街の道に数人の警察官が這いつくばる風景から、男性キャスターの姿に映像が切り替わる。
「工場跡地で女性の遺体が発見されました。昨日午前１０時頃、M区T町にある工場の跡地で若い女性の遺体があると、警察に通報がありました」
キャスターの読み上げる文章に反応して、泪子は目を見開き、リモコンのボタンを押そうとしたのであろう指を止めた。
泪子は体を起こして画面に食いついた。
キャスターの無表情な顔から、寂れた工場に映像が替わる。
1階に青いビニールシートが掛けられた工場の周りを警察官が歩き回っている。
キャスターは読み続けた。

「亡くなったのは谷口夕子さん（３１）で、遺体は死後数日経過していました。遺体の状況から、警察では谷口さんが何らかの事件に巻き込まれたものと見て、捜査を進めています」
画像がキャスターの顔に切り替わる。
「新たな生命の誕生です。Ｕ動物園でパンダの赤ちゃんが生まれ…」
泪子はリモコンの電源ボタンを押した。
プツッという音を伴い、画面が暗転する。
泪子はリモコンをベッドの上に放り投げると、
「…死後数日かぁ」
と、欠伸混じりに言った。
泪子は立ち上がると、跳ねた髪を指先でいじりながら、ふらふらとした足取りでドアに向かった。

第12章：道

ブラインドの隙間からもれる日光が、烏山の顔に光の線を作った。
烏山は顔をしかめると、ゆっくりと上半身を起こす。
烏山探偵事務所のソファの上に烏山はいた。
黒いスーツ姿の烏山は、ネクタイをゆるめ、上着を掛け布団がわりにしている。
烏山は肘掛けに乗せていた長い脚を床におろす。
切れ長の目を細めて、烏山は大儀そうに立ち上がった。
烏山はテーブルの上のリモコンを手に取り、テレビの電源を入れると、流し台の方に向かった。
テレビのニュースキャスターの女性が記事を読み上げる。
烏山は顔を洗う。
「昨夜未明、M区で「タクシードライバーの男性が殺害されている」と、付近の住民から通報がありました」
烏山はタオルで顔の水滴を拭う。
「亡くなったのは屋島太郎（ヤジマタロウ）さん（54）で、その日の売上が無くなっていました。中には売上の現金4万5千円が入っていたとみられ、警察は強盗殺人とみて調査を進めています」
烏山は冷蔵庫から水の入った2lのペットボトルを取り出し、直接口をつけた。
「M区では同じようにタクシードライバーが殺害される事件が先月にも起きており、警察では事件の関連性があるとみて、調査を続けています」
住宅街の道に数人の警察官が這いつくばる風景から、女性キャスターの姿に映像が切り替わる。
烏山はペットボトルを冷蔵庫に戻し、ソファに戻った。
「次のニュースです。昨夜9時頃、警視庁に「人をはねた」と証言する男が出頭し、現在取り調べを受けています」

ニュースキャスターの真面目そうな顔から、朝の警視庁を映した画像へ切り替わる。
姿の見えなくなったキャスターが言葉を続けた。
「調べによりますと、出頭した男は都内の会社員、下田光洋（シモダ ミツヒロ）（39）で、」
画面が切り替わる。
今度の映像は、坂上冬彦のアパートの近くを通っている、都道の映像だった。
場所は違うが、画面下のテロップが同じ道であることを告げている。
「1週間ほど前の深夜に車を運転していたところ、飛び出してきた男性をはねたうえ、遺体を埼玉県の山に捨てたと話しており、警察では事実を確認するとともに、容疑が固まりしだい、男を逮捕する方針です」
烏山はリモコンの電源ボタンを押して、テレビを消した。
烏山は目を閉じて、背もたれによりかかると、ゆっくりと目頭を揉んだ。
しばらくその状態が続いたが、やがて、
「…かもしれない」
と呟き、ソファから立ち上がった。
烏山はデスクの上の電話機から受話器を取り上げ、立ったままプッシュボタンを押した。
相手が出るまでの間、烏山は片手をポケットに突っ込み、ブラインドから漏れる光を睨みつけていた。
コールがやんで、相手が受話器を上げたことを烏山に伝えた。
「…何だ？」
不機嫌そうな、ぼんやりとした声で渋川警部補は訊いた。
「烏山です。調べてもらいたいことがあります」
「何だ？」
「昨日、人をはねたと言って出頭してきた男、知っていますか？」

烏山は目を瞑った。
渋川はこらえずに、大きな欠伸をすると、
「…ああ、知ってる。わざわざ捨てたのに、出頭してきた馬鹿やろうだろう。それがどうした？」
と、面倒くさそうに訊いた。
「その男に坂上冬彦の写真を見せてみてくれませんか」
「…何？」
烏山の言葉に、渋川の口調が変わった。
「どういうことだ」
「その男がはねたと言っている道路が、坂上のアパートに近くを通っているんですよ」
烏山は、言葉を選びながら話しているようで、
「可能性の話です。あくまでも。しかし、もしもひかれたのが坂上冬彦なら、谷口夕子殺しの容疑者から彼は排除されるんじゃないでしょうか」
と、はっきりとした口調で言った。
渋川は思案しているように、ゆっくりと、
「…それで、もしかしたら坂上をはねたのが事故ではなく、故意だった可能性もある、か？」
と、烏山に聞き返した。
「その可能性もあります。そうなると、谷口夕子殺しの容疑者が増えてしまうかもしれませんがね」
数秒間の沈黙の後に、渋川は答えた。
「…分かった。やってやる」
「お願いします。結果は知らせてくららい」
「またな。舌っ足らず」
渋川は電話をきった。
烏山は受話器を下ろした。
烏山は目を開けてデスクに背中を向けたが、何かに気付いたような表情になって、再び電話機に向き直った。

受話器を取り上げ、烏山はボタンを押す。
3回目のコールが鳴り止まない内に、
「はい。姫路です」
と、泪子の声が烏山の耳に届いた。
「起きてたのか」
と、烏山は少し意外そうに言った。
「叔父さん？」
と、泪子が訊く。
「そうだ」
「へぇ。起きてたんだ。意外だなぁ」
泪子のからかうような口調に、烏山は顔をしかめる。
「それで、何か用？」
「ああ。今日はバイトは休みだ。来なくていい」
「えぇ？」
泪子は素っ頓狂な声をあげて、
「どうしたの？急に」
と、言葉を続けた。
「別になんでもない。休みは欲しくないのか？」
「そりゃ、欲しいけどさ」
「それなら問題ないだろう」
泪子は軽く唸って、
「怪しいなぁ」
と、疑わしそうに言った。
「怪しくないさ」
「怪しいよ」
「怪しいか？」
「わかった！デートだ！」
突然の泪子の大声に、烏山は耳から受話器を離す。
「なるほどね。邪魔なんだ！私が！私だって、理由を言ってくれればついていくような野暮なことはしないって！でもさ、相手くら

い教えてよ。誰？もしかして明日香さん？」
大声をあげている受話器を見つめ、
「…朝から元気だな」
と、疲れたように呟き、受話器を耳に当てた。
「とにかく、今日は休みだ。切るぞ」
「あ、ちょっと待っ…」
泪子が喋り終わらない内に、烏山は受話器を下ろした。
烏山は受話器を当てていた右耳を片手で押さえ、もう一方の手でソファの上に投げ出された上着をひっつかむと、事務所の出入り口に向かって足早に移動した。

第13章：灯

青いミニクーパーが住宅街を走っていた。
狭い道を、自転車やスーパーのビニール袋をぶら下げた主婦とすれ違いながら、青い車はゆっくりと進んだ。
角を曲がると、アパートの横に車が数台止めてある空き地があった。
烏山はミニクーパーをその空き地の隅に停めると、車から下りた。
手には赤いバラの花束が握られている。
烏山はキャンディを口に含んだまま少し顎を上げ、周りをゆっくりと見回した。
アパートや一戸建ての住宅が立ち並ぶ中、離れたところに青いビニールシートが張られているのが、烏山の位置から小さく見えた。
烏山はキャンディを噛み砕くと、白い棒を地面に投げ捨てて、ビニールシートに向かって進み出した。
いくつかの角を曲がり、烏山は青いシートが張られている寂れた工場の前を通る道についた。
左側に工場を眺めながら、烏山は歩を進める。
工場の敷地内へと続く門は錆び付いて、伸び放題になっている芝生の上に倒れていた。
門の代わりに入り口には黄色いテープが張り巡らされ、その前には数人の野次馬とテレビ局の人間らしい者が詰めかけている。
押しかけた人々に荒らされないようにするためか、谷口夕子に捧げられた花々は入り口から少し離れた場所に固まっていた。
野次馬の前には制服姿の警察官が2人、神妙そうな面もちで突っ立っている。
烏山は、鉄格子のようになっている工場の仕切りの隙間から、内部を覗いた。
あまり広くはない敷地の大半を工場が占めている。

錆び付いた屋根。
屋根の下にぶら下がっている、色の剥げた看板が、ここがかつてはパン工場であったことを知らせる。
1階部分にはビニールシートが　張り巡らされ、中の様子は外からは見えない。
野次馬のざわついた声に混じり、青いシート越しに人間が動く音や、何事かを指示する声が時折漏れていた。
烏山は格子から離れた。
供え物が集まった場所に片膝をつき、烏山はバラの花束を静かに置いた。
烏山の顔には何の感情も浮かんでいない。
無表情で、赤い花を見つめていた。
烏山は立ち上がると、顔を上空に向けた。
ゆっくりと視線を動かし、烏山は工場の門の横にある街灯の所で顔の動きを止める。
野次馬の後ろを通り過ぎ、街灯の真下で烏山は足を止めた。
烏山は斜め上を向いたまま、工場の横にある3階建ての一軒家を見つめていた。
烏山は視線を動かさず、右手側に足を動かす。
6歩目で烏山は足を止めた。
そこは鉄格子から離れ、工場よりは向かい側にある塀に近い場所だった。
烏山の視線の先にあったのは、2階建てのアパート。
そのアパートの2階、一部分に工場にあるものと同じ、青いシートが張られていた。
その青いシートは烏山から見て右から2番目にある部屋を隠していた。
烏山は左足を動かし、工場側に1歩戻った。
シートは工場との間にある家屋に隠れ、端の部分がチラリと見えるだけだった。

烏山は街灯に視線を移す。
細長い、薄汚れた街灯がかつてのパン工場を背景にして立っている。
街灯は他に、遠く離れた工場の曲がり角にあるだけだった。
烏山の上着の内側がブルブルと震えた。
烏山は振動の発生源を取り出し、ディスプレイに表示されている時刻を見た。
午後２時４１分。
人ごみから逃れるように、烏山は工場から離れながら、電話に出た。
「もしもし」
「結果が出た」
と何の前置きもなく、渋川警部補は話し出した。
「どうでした？」
渋川は普段よりも真面目な口調で言った。
「お前の想像通りだ。ひかれたのは坂上冬彦に間違いない。下田のアパートガサ入れしたら坂上の財布やら携帯やら見つかった」
烏山はコンクリートの塀に寄りかかり、目を瞑った。
「…そうですか」
「坂上と下田の関係はこれから本格的に調べる」
「そうですか」
渋川は、少し間をあけて言った。
「おい、烏」
「何ですか」
「…いや、何でもない。切るぞ」
烏山は目を開けて、通話の切れた携帯電話のボタンを押した。
いくつかのボタンを押して、再び電話を耳に当てる。
相手が電話に出るのに、数コールを要した。
烏山は相手に告げた。
「もしもし。烏山です。お話ししたいことがあります。事務所に

来て頂けますか？」

第１４章：告

烏山はやかんが湯気を出し始めたのを見届けると、壁にかけてある時計を見上げた。
時計の針は、午後４時１０分前を告げている。
烏山が作り付けの棚からカップを２つ取り出したとき、控え目にドアがノックされた。
「どうぞ」
烏山の声に応じるかのように、ドアがゆっくりと開かれる。
「寒かったでしょう。お入りください」
太田真紀子は烏山の言葉に促されるように事務所の中に足を踏み入れた。
髪をまとた真紀子は、昨晩と同じベージュのコート姿だった。
「紅茶とココア、どちらがよろしいですか？」
ソファに座った真紀子に烏山は訊いた。
「ココアを」
真紀子はコートを脱がずに、ソファに身を硬くして座っている。
その様子を、沈みかけた太陽がオレンジ色に染め上げていた。
烏山がお茶の用意を終えるまで、事務所の中には沈黙が流れた。
湯気のたつカップを烏山が運び、ソファに腰を下ろすと、真紀子はおずおずといった様子で口を開いた。
「…あの、お話って？」
烏山は上着の内ポケットから革製の小物入れを取り出し、
「…調査についての報告です。まだ報告書は作っていませんが、お知らせしたほうがいいかと思いまして」
と言って、小物入れからキャンディをつまみ出した。
真紀子はコートの裾を握りしめた。
烏山は小物入れをテーブルの上に置き、キャンディの包みを手慣れた様子で剥がす。

烏山は言った。
「…結果から言います。私は坂上冬彦さんがどこにいるのかは分かりました。しかし、彼をあなたの前に連れてくることはできません。何故なら、彼はすでに亡くなっているからです」
真紀子は驚いたように両目を見開く。
「亡くなって…？」
「生きてはいない、ということです。交通事故だったようです。ニュースにもなるでしょう。…お力になれなくて申し訳ありません」
そう言って、烏山はキャンディを口に運ぶ。
真紀子は体から力が抜けたように、ソファの背もたれにもたれかかった。
真紀子は茫然とした様子で、
「…そんな」
と、呟いた。
烏山は真紀子を見つめた。
真紀子は烏山の視線に気付いた様子も無く、ただココアのカップを見つめている。
烏山は右手を自分のカップの上にかざし、眉間にシワを寄せると、手を引っ込めた。
「…それだけですか？」
真紀子の声に、烏山は顔を上げた。
真紀子はカップから顔を上げず、ぼんやりとした様子で言葉を続けた。
「…それだけで、何も訊かないんですか？」
烏山はカップを見つめ、相変わらずの無表情で答えた。
「…私の仕事は坂上冬彦を見つけることです。結果はいいものとは言い難いですが、彼を見つけることはできた。それが全てです」
真紀子はゆっくりと烏山を見上げる。
烏山もそれに合わせるかのように、顔を上げた。
「…たとえ、あなたが嘘をつこうが人を殺そうが、関係ないこと

です」
烏山は、真紀子の焦点のはっきりしない瞳を見据えた。
真紀子は、ポツリと言った。
「…やっぱり、気付きましたか」
烏山はキャンディを口に含み、
「証拠も何もありません。あるのは私の推測だけです」
モゴモゴと口を動かしながら言った。
「聞かせてもらえますか？」
真紀子はカップに手を伸ばしながら言った。
烏山は静かに語りだした。
「…あなたの計画は、ずさん過ぎた。すぐにバレる嘘を2つもついた。1つは坂上冬彦の恋人を自称したことと、もう1つは谷口夕子の部屋から坂上を見た、と言ったこと。恋人かどうかは彼の周りを調べれば分かるし、後者は現場に行けば分かる」
真紀子はカップを両手で包み込むように持って、ココアを一口飲んだ。
「あれ？見えませんでした？」
と、真紀子は落ち着いた表情で訊いた。
今までの彼女の表情の中で、最も落ち着いた表情だった。
「…工場とアパートの間には3階建ての家があるんです。家が邪魔して、あのアパートから見えるのは通りの一部、しかも工場とは逆方向です。百本譲って見えたとしても、人の顔を判別できるくらいに光があったとは思えない」
「その家の屋根越しに見えたのかもしれないわ」
烏山は口から飛び出している棒をつまんだ。
「アパートは2階建てです」
真紀子は穏やかに微笑んだ。
「そうだったわ。それじゃ、無理ですね」
「ええ。無理です」
そう言って、烏山はカップに手を伸ばした。

真紀子はカップを口に運んだ。
「ずさんでもよかったんです。坂上さんの居場所が分かれば、それで…」
烏山はカップに唇をつけたが、一口も飲まずにテーブルの上に戻した。
真紀子は言葉を続けた。
「まさか、坂上さんが亡くなってるなんて思いませんでした。普通、思わないでしょう？自分の殺した人間の恋人も死んでるなんて。しかも、同じ時期に」
烏山はキャンディを転がしながら、
「…運命的とも言えますね」
と、無感動な声で言った。
真紀子はクスリと笑うと、
「ロマンチストですね。意外に」
と、烏山に言った。
烏山はキャンディをガリガリと噛み砕いた。
真紀子はカップを遠い目をして見つめる。
「…でも、夕子にも運命の人がいたのかもしれませんね。もしかしたら」
真紀子はゆっくりと、思い出すように語り始めた。
「私と夕子は学生のときから知り合いだったんです。もう高校の時から一緒。周りからは親友同士なんて言われてました。私はただ、彼女に振り回されてただけなんですけどね」
真紀子は一息入れるようにココアを飲んだ。
「あの娘、子どもっぽいところがあって、すぐに人のものを欲しがるんです。物でも彼氏でも何でも。それで、すぐに飽きて捨てるんです。その性格は大学になっても変わりませんでした」
「どうして、あなたは彼女と一緒に居続けたんですか？」
新しいキャンディの包みを開けながら、烏山は訊いた。
「あんまり被害が無かったからかな。でも、それも大学2年まで

ですね。私達、大学に入ったら疎遠になったんです。学部が違ったし、サークルも私は入らなかったから。でも、私の学部の友達が夕子と同じサークルに入ってて、噂はよく聞いてましたけどね」

真紀子はキャンディをくわえたまま、ココアを飲み始めた烏山を見つめた。

「…その友達に彼氏が出来たんです。2年になってすぐでした。喜んでたなぁ。あんまりパッとしない娘でしたし、初めての恋人だったみたい。舞い上がってたなぁ」

真紀子はそう言うと、視線を悲しそうにカップに落とした。

「でも、それも長くありませんでした。彼氏と別れたんです。あとから聞いたんですけど、原因は夕子でした。彼氏を寝取ったんです。彼氏と別れてからのあの娘は見てられなかった。酷い状態でした。ろくにごはんも食べないで…」

真紀子は寒そうにカップを持つ手に力を込めた。

「…結局、彼女は自殺しました。夕子のほうは何とも思ってなかったみたい。私も最初は夕子のことを軽蔑しましたけど、しだいに忘れていきました。冷たいと思いますか？」

と、自嘲気味に真紀子は訊いた。

烏山は答えた。

「別に思いませんね」

真紀子は辛そうに微笑んだ。

「…夕子とは卒業してからも時々会いました。お互いの家に泊まったりして。それで…。夕子は見つけたんです。私の家で」

言葉を切った真紀子に、烏山は訊いた。

「何を見つけたんですか？」

真紀子は烏山の視線から逃れるように、ココアを飲んだ。

「…夕子が入っていたサークル全員で旅行に行った時に撮ったビデオです。もちろん、自殺した娘も映ってます。だって、その娘が私の家に置いていったビデオなんですから。形見みたいなものですね」

烏山は無言で真紀子の言葉の続きを待っているようだった。
「夕子はそのビデオを持って帰りました。自分のは無くしちゃったからって言って。…それで6日前。私、夕子にビデオ返してって言ったんです。しばらくたってたし。夕子、何て言ったと思います？」
真紀子は烏山の方をチラリとも見ずに訊いた。
「分かりませんね」
と、烏山はココアをすすりながら言った。
「無くしたって言ったんです。彼氏とも見たから、もしかしたら彼氏の家かもしれないって。それに、第一あんた映ってないんだからいらないでしょ？って」
真紀子はカップをテーブルの上に置き、天井を見上げた。
「その言葉聞いたとたんに、私真っ白になったんです。何故なのか、今でも分かりません。でも気付いたら夕子の首を延長コートで絞めてました」
「…では、あなたが坂上冬彦の居場所を知りたがったのは、そのビデオを取り戻すためだった？」
真紀子は烏山を見た。
「そうです。くだらないでしょう？」
烏山は何の感情も感じさせない声で答えた。
「別に」
「優しいんですね」
そう言って、真紀子はココアを飲み干した。
「…ごちそうさまでした。そろそろ行きますね」
真紀子はカップを静かに置いた。
「もし自首されるのでしたら、知り合いの悪徳警官を紹介しますよ。厳しい取り調べはされないでしょう」
そう言って、烏山はデスクの方に向かった。
真紀子は西日に目を細めながら、
「…訊いてもいいですか？」

と、烏山の背中に訊いた。
烏山はメモ帳にペンを走らせながら、
「なんでしょう？」
と、聞き返した。
「コーヒー、お嫌いなんですか？紅茶は分かりますけど、ココアをすすめられるなんて初めてだったものですから」
烏山はしばらくの間黙ってペンを走らせていたが、書き終わるとメモ用紙を片手にソファに戻った。
「…警視庁の渋川という警部補にこのメモを渡してください」
そう言って、烏山はメモを真紀子に渡す。
真紀子は折り畳まれたメモをコートのポケットに入れた。
烏山はその様子を眺めながら、
「…コーヒーって、苦いでしょう。だから、嫌いなんです」
と、言った。
真紀子は少し驚いた表情になり、
「砂糖を入れればいいじゃないですか？」
と、烏山に言った。
烏山は答えた。
「それでも、甘さの中にコーヒーの味が残る。いくら砂糖を入れても消えない。甘くしようとしても、コーヒーはコーヒーなんですよ」
真紀子は、烏山を見つめた。
顔の左半分に影をおとし、烏山は真っ直ぐに真紀子を見つめ返す。
「…そうですか」
と、静かに言って、真紀子は立ち上がった。
「依頼料は口座に振り込んでおきます。それでは」
真紀子はゆっくりと振り返り、入り口のドアに向かった。
烏山は無言で真紀子の背中を見つめた。
真紀子はドアを開くと、目を丸くして足を止めた。
真紀子は短く、楽しそうな笑い声をあげると、

「風邪ひくわよ。気をつけてね」
と言って、足元にあるものを避けるような足取りで、事務所から出ていった。
真紀子の足音がしだいに遠くなる。
ソファに座った烏山は、言った。
「…何してるんだ？」
事務所の外、ドアがあった所に泪子がしゃがみ込んでいた。
ドアに耳を当て、盗み聞きをしていたらしく、赤い顔の中でも、特に右の耳が赤くなっている。
泪子は鼻をこすると、白いダウンジャケットに両手を突っ込み、立ち上がった。
ふてくされたような顔をしている泪子に向かって、烏山はいつもの調子で言った。
「…早く入れ。ココアでも飲むか？」

エピローグ

水曜日。
烏山が太田真紀子に調査報告をしてから3日後。
依頼者のいない事務所には、退屈そうな顔をした泪子しかいなかった。
泪子はデスクの椅子に馬乗りになり、ぼんやりと窓の外を眺めている。
午後の日差しを浴びて、泪子は眠そうな目をしている。
「…暇だぁ」
と、泪子は口を半開きにして言った。
事務所の外の階段をのぼる音が室内に届き、やがてドアがガチャリと開いた。
緑色のエプロン姿の烏山がドアを開けて入ってきた。
烏山の口からは白い棒が飛び出し、右頬が膨らんでいる。
「暇か？」
と、烏山はモゴモゴと言った。
泪子は窓ガラスに写った烏山を見ながら、
「見ての通り」
と、素っ気なく言った。
烏山はゆっくりとデスクに近づいた。
泪子はガラスの中の烏山に訊いた。
「…ねぇ、叔父さん。太田さん、連絡つかなかったとき、あったよね？」
「ああ」
烏山は泪子の背中に答えた。
「どうして？」
「…何でも、墓参りに行っていたらしい。携帯を自分の家に置いたまま」

泪子は椅子を回転させ、烏山に向き直った。
「墓参り？」
「亡くなった友人の墓だ。どういった心境で行ったのかは分からない。しかし、事実だ。裏も取れているらしい」
「…そう」
泪子は再び椅子を回転させ、窓の外を見つめる。
「坂上冬彦が交通事故にあったのって、偶然だったの？」
烏山は鏡の中の泪子を見つめ、
「偶然だ。ひいた人間は坂上とは面識もなにもない。曲がり角から飛び出してきた男を、酔った男がひいた。策略も何もない」
と、淡々とした口調で言った。
「それじゃ、『空き巣未遂』さんは？」
「調べたが、彼も坂上とは無関係だった。生ぅるぇもそらちもちらう」
泪子はガラス越しに烏山の目を見つめ、
「…生まれも育ちも違う？」
と、聞き返した。
「そうだ」
「それじゃ、悪いことしたな」
「そうかもしれないな」
そう言って、烏山は髪をかく。
泪子は三度椅子を回転させた。
「泪子。下を手伝ってくれないか。年末は忙しいんだ」
烏山の頼みに、泪子は渋々といった様子で立ち上がる。
烏山は泪子に先立って、ドアに向かったが、3歩歩いたところで不意に足を止めた。
泪子はデスクに両手をついた格好で、
「どうしたの？」
と、烏山に訊いた。
烏山は普段と変わらない表情で振り返った。

「…坂上のアパートに初めて行ったとき、セリロラリ…」
泪子はデスクをまわりながら、
「えっと、舌が回らなくなるような名前の人の曲のこと？」
と、思い出すように言った。
烏山はキャンディの棒を上下に動かす。
「そうだ。事実、俺は舌が回らなかった」
「叔父さんはいつもでしょ？」
「…とにかく、その時に聞いた曲の名前を覚えているか？」
泪子は大股で烏山の横に並んだ。
「覚えてる。『ラウンド・ミッドナイト』でしょ？」
「そうだ。『ラウンド・ミッドナイト』。直訳すると、『真夜中の曲がり角で』」
「真夜中の…？」
そう言って、泪子は言葉を切る。
烏山は言った。
「…坂上がひかれた時、場所も『真夜中の曲がり角』だ」
泪子はポカンとした表情をしていたが、やがて頭を左右に振って、
「『狙いすぎ』だよ」
と、烏山に言った。
烏山はドアノブに手をかけると、
「…そうかもしれないな」
と呟き、事務所のドアを開けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2839f/

捜索烏(ソウサクカラス)

2010年10月10日00時22分発行